

「蓄積と拡大再生産」(『資本論』第2部第21章)の草稿について(上) 『資本論』第2部第8稿から

OTANI, Teinosuke / 大谷, 禎之介

(出版者 / Publisher)

法政大学経済学部学会

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

経済志林 / The Hosei University Economic Review

(巻 / Volume)

49

(号 / Number)

1

(開始ページ / Start Page)

1

(終了ページ / End Page)

77

(発行年 / Year)

1981-07-25

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00008427>

「蓄積と拡大再生産」(『資本論』第2部 第21章)の草稿について* (上)

——『資本論』第2部第8稿から——

大 谷 禎 之 介

は じ め に

『資本論』第2部および第3部の現行版は、未完のまま残されたマルクスの草稿をエンゲルスが刊行可能なかたちまでに仕上げたものである。多年にわたったこの作業がどんなに困難なものであったかは、エンゲルスがこの2つの部の序文や多くの手紙のなかで書いているところからもうかがい知ることができる。しかし、そのさいエンゲルスがマルクスの草稿にじっさいにどの程度の手を加えたのかということになると、エンゲルス自身

* Teinosuke Otani: Über das Manuskript von „Akkumulation und erweiterte Reproduktion“ („Das Kapital“, Buch II, Kapitel 21).

Der Verfasser behandelt in dieser Abhandlung einen Abschnitt der Entstehungsgeschichte des „Kapitals“ von Karl Marx. Er untersucht das VIII. Manuskript des II. Buches des „Kapitals“, das sich im Besitz des Internationalen Instituts für Sozialgeschichte (IISG) in Amsterdam findet, vor allem einen darin befindlichen Teil mit dem Titel „II. Accumulation oder Production auf vergrößerter Stufenleiter“, und vergleicht diesen mit der Fassung von Engels' Ausgabe. Dabei werden die von ihm entzifferten Texte des Manuskripts als Quelle hinzugefügt.

Der Verfasser möchte an dieser Stelle dem IISG, das ihm die Gelegenheit gegeben hat, das Archiv des Instituts zu benutzen, und namentlich Herrn Dr. G. Langkau, der ihm beim Benutzen von Materialien Hilfe geleistet hat, danken.

2 「蕃積と拡大再生産」（『資本論』第2部第21章）の草稿について（上）

の記述からは、さまざまな想像ができるだけである。それは、マルクスの草稿そのものの調査にもとづく現行版との異同考証が多少なりとも行なわれるようになるまでは、一般にかなり過少に評価されてきたといえるであろう。1950年代からそのような調査や考証の結果が発表されるようになって、この2つの部の現行版が意想外に広い範囲にわたってエンゲルスによる書き変えや書き加えを含んでいることがわかってきた。¹⁾

わたくしも、かつて第2部の現行版のある個所をすこし立ち入って調べようとしたさいに、わたくしがそれまでに漠然と抱いていた観念、すなわち、エンゲルスがとくに注記していないかぎり現行版はマルクスの文章をそのまま収めているのだという固定観念が正しくなかったことを痛感させられた。²⁾ それいらい、第2部と第3部とをひもとくたびに、「これはマルクスの文章そのままだろうか、エンゲルスの手が加わっているのではないだろうか」という疑念を押えきれず、またそのたびに、その個所を含むマルクスの草稿を見たいと切望するようになった。その後新MAGAの刊行が始まり、その第2部の『資本論』とその準備労作³⁾で、これまで一般に見ることができなかった経済学草稿が次々とその全容を現わしてきている。いずれは全草稿が公開されることになるので順調な進行への期待は大きい。しかし、予告されている刊行の順序だけからみてもかなり先にならないと読めそうにない草稿も少なくない。よく知られているように、第2部と第3部との草稿のオリジナルは、その大部分がアムステルダムの社会史国際研究所（略称 IISG）に、残りがモスクワのマルクス=レーニン主義研究所に保存されている。また、いまモスクワの ML 研と共同で MEGA の編集を行なっているベルリンのマルクス=レーニン主義研究所にも諸種の資料があるにちがいない。そういうわけで、かねてから、機会があればこれらの研究所を訪れてみたいと考えてきた。

さいわい1980年度（のちに1981年度も）、法政大学在外研究員として滞欧することになったので、この期間中に『資本論』の草稿やその解説文に接する可能性を探ることにした。まず訪れたのが IISG であり、1980年11

月からしばらくのあいだ、ここに所蔵されている草稿のうち第2部の諸草稿を調べることができた。

今回 IISG を訪れる さいに わたくしが とくに 強い 関心 を もって いた の は、 エンゲルス が 「第 8 稿」と 呼ん だ 第 2 部 の 草 稿 だ る。 そ れ は 第 2 部 の 草 稿 中 の 最 後 の も の で あ る だ け で な く、 総 じ て 『資 本 論』 草 稿 中 の 最 後 の も の で あ る。 現 行 版 第 2 部 を 見 れ ば わ か る よ う に、 そ れ は 「第 3 篇 社 会 的 総 資 本 の 再 生 産 と 流 通」 の 約 75% に 利 用 さ れ て お り、 と り わ け そ の う ち の 「第 21 章 蓄 積 と 拡 大 再 生 産」 は す べ て こ の 第 8 稿 か ら 取 ら れ て い る。 し か も 第 3 篇 の 他 の 一 半 の 約 25% に 用 い ら れ た 第 2 稿 は、 さい わ い 日 本 で も そ の マ イ ク ロ フ ィ ル ム を 見 る こ と が で き る の に、 第 8 稿 に つ い て は そ う し た 可 能 性 が な い だ け で な く、 こ れ ま で ぐ け に さ れ て い る 情 報 も ご く わ ず か だ る。 わ た く し は IISG で、 第 2 部 の 諸 草 稿 の 概 略 を 調 べ た あ と、 す ぐ に こ の 第 8 稿、 そ し て と く に 現 行 版 第 21 章 に あ た る 部 分 の 内 容 の 掌 握 を 試 み た。 し か し な ん と い っ て も 「あ の 有 名 な、 と き に は 書 い た 当 人 で さ え 読 め な い 筆 跡」 (K. II, S. 7³⁹) だ る。 草 稿 の フ ォ ト コ ピ ー を に ら ん で い た だ け で は、 読 み 直 す た び に 筆 跡 を 迎 る こ と に 気 を 取 ら れ て、 内 容 の 把 握 ど こ ろ で は な い。 そ こ で 結 局、 エンゲルス が 第 3 部 を ま と め る さい に 取 っ た 手 順 (K. III, S. 11)、 す な わ ち、 ま ず 全 文 の 解 読 ノ ー ト を つ づ け り、 そ の あ と で そ れ を 読 ん で 内 容 を 考 え る と い う 手 順 を、 わ た く し も 取 ら な け れ ば な ら な かつ た。 も ち ろ ん、 内 容 を 理 解 し て は じ め て 判 読 で き る 個 所 も 少 く な い の で、 わ た く し は こ の 2 つ の 作 業 の あ い だ を な ん ど も 往 復 し た の で あ る。 そ の よ う に し て い ち お う で き あ が っ た も の を 読 み 返 し て み る と、 マ ル ク ス の 草 稿 の 性 格 が、 ま た そ れ と 現 行 版 と の 関 係 が、 し た が っ て ま た エンゲルスの編集作業のありようが、はっきりと浮かびあがってくるように思われた。こうして、ともかくも第21章を、草稿との違いについての不安をもたずに読めるようになったので、その立ち入った研究はさておき、わたくし自身としては、この部分についての IISG での仕事はひとまずその目的を達したのである。

4 「蓄積と拡大再生産」(『資本論』第2部第21章)の草稿について(上)

しかし翻って考えてみると、第21章の草稿を見ることを切望していたのはわたくしひとりではない。再生産論や恐慌論に関心をもつ多くの人々がその発表を待ち焦がれている。しかも、MEGAでのこの部分の発表は、第2部の最後の原稿であるということからみて、まだかなり先のことになるであろう。それまでのつなぎとして、わたくしの拙い作業でもなにかの役に立つことはないものだろうか？ わたくしの作業は、いうまでもなく、十分な解説の習練を積みぬ者が短期間になし終えなければならなかったものであり、解説に誤りが残っていることも確実であるが、しかし、マルクスの叙述の全体の流れや、エンゲルス版との大きな相違や、また少くともマルクスの角括弧——前後の叙述からなんらかの意味で岐論として区別するさいの——や下線ぐらいは、読み取ることができるのではないだろうか？ またその信頼度については、この仕事はMEGAでのような多くの専門家によって周到に仕上げられた共同労作とはちがって、個人が独力で自分のためにした作業結果を公開して参考に供するものにすぎないことを、あらかじめはっきりと断っておくことで、誤認をふせぐことができるのではないだろうか？

わたくしの最も信頼する人々の意見も聞いたうえで、このさいは拙速を尊ぶべきと判断し、在欧中ではあるがこちらで調査結果をまとめ、発表することにした。発表を急いだのは、ひとつには、この調査がこれから訪れる予定の2研究所での調査とは別のものであることを明示する必要がある、と考えたためである。手許に十分な資料もないまま作業をしなければならないので、あるいはすでに発表されていることを繰り返すことになる部分もあるかもしれない。また、現行版との相違については、大きな点については触れるつもりであるが、細かい異同考証をやっている余裕もない。さらに、紙数の関係で、当初用意した「社会史国際研究所所蔵の『資本論』第2部の諸草稿について」の項を削らざるをえなかった。⁴⁾このように不十分なものではあるが、しかしわたくしとしては、これでも、さまざまな種類の必要な考証を加えながら草稿の各部分を細かく調べてやっ

獲得できたもののまとめのつもりなのであり、したがって IISG の所蔵資料をただ写し翻訳しただけの仕事ではなかったと考えているのである。⁵⁾

- 1) そのような調査や研究としてここで考えているのは、第 2 部についてのハリトノフの研究(Ю.Т. Харитонов, *Из истории разработки марксистской экономической теории*, 《Вопросы истории》, № 2, 1956) や第 3 部についての佐藤金三郎氏の諸論稿、両部についてのリュベルの注解 (*Oeuvres de Karl Marx, Économie II*, Édition établie et annotée par Maximilien Rubel, Paris 1968) などである。
- 2) 拙稿『『内在的矛盾』の問題を『再生産論』に属せしめる 見解の一論拠について——『資本論』第 2 部注 32 の『覚え書き』の考証的検討——』, 東洋大学『経済経営研究所研究報告』No. 6, 1973 年。このなかでわたくしは第 2 部の注 32 について若干の考証を試みたのであるが、その時点ではこの注にあたる部分を含む第 2 部第 2 稿を見ることができなかった。その後、法政大学大原社会問題研究所に問題の第 2 稿のマイクロフィルムがあることがわかり、他方、モスクワのマルクス=レーニン主義研究所から当該部分を含む解論文 1 ページのコピーを入手することができ、わたくしの考証に訂正を加える必要が生じた(この点については、さしあたり、久留間敏造「恐慌論体系の展開について(2)」, 『経済志林』第 44 巻第 3 号, 1976 年, を参照されたい)。しかし、わたくしは上記拙稿を發表したさいの目的はいちおうはたされたと考えたことと、再度この問題を論じるときには、第 2 部の諸草稿の調査をふまえたいと考えたことから、これまで、同じ問題を論じることにも拙稿に対する諸批判に答えることもしないうる。今回の IISG での調査で、必要な前提がある程度まで充たされてきていると感じているので、帰国後機会をみて、訂正や諸批判へのお答えを含め、再度論じたいと思っている。
- 3) 以下本稿では、『資本論』を K. と略し、これに I, II, III の巻数を付し、MEW 版(いわゆる全集版)のページをあげる。また、すべての引用文において〔 〕で挿入されているのは引用者によるものである。
- 4) この部分はいずれ別稿として發表するつもりである。
- 5) IISG で閲覧したものについての公表には一定の限界があると聞いている。しかし、わたくしの場合には、あらかじめ利用願いのたぐいを出すこともなく同研究所を訪れて、研究員のランカウ(Götz Langkau)氏と面談したのち同所のアルヒーフの利用を許されたといういきさつのためか、調査結果の公表に関する条件らしいものはなにひとつつけられていない。本稿については、ランカウ氏にその構成を説明し、大学の学術雑誌に發表する旨を告げる機会があったが、彼はそれに対してどのような注文もつけようとしなかった。

6 「蓄積と拡大再生産」(『資本論』第2部第21章)の草稿について(上)

1 『資本論』第2部第8稿について

第2部第8稿は第2部草稿中の、また総じて『資本論』の全草稿中の最後のものである。エンゲルスは第2部の「序文」で、1877年以降に書かれた第5—8稿のうちの最後のものであるということ以外、第8稿の執筆時期についてふれていないが、これまで、1880年ないし1880—1881年に書かれたものと推定されてきている。¹⁾

第8稿はこのような執筆時期の点で注目されるだけでなく、それが「社会的総資本の再生産と流通」についてのマルクスの最後の叙述であり、しかもこれだけが拡大再生産についてのある程度まで立ち入った研究を含んでいる、という点でも、きわめて重要な意義をもっている。

エンゲルスは第2部の「序文」で次のように書いている。

「このころ〔1877—78年ごろ〕、マルクスは、自分の健康状態の完全な革命なしには彼自身の満足するような第2部と第3部との仕上げを完了することはとうていできないということを、はっきりと感じていたように思われる。じっさい、第5—8稿は、病状の重圧にたいするむりやりな挑戦の痕跡をあまりにもしばしば帯びている。第1篇の最も困難な部分は第5稿で新しく書き改められた。第1篇の残りと第2篇の全体(第17章を除いて)には理論上のたいした困難はなかった。これに反して、第3篇、社会的資本の再生産と流通は、彼にはどうしても書き直しが必要だと思われた。すなわち、第2稿では再生産が、まず、それを媒介する貨幣流通を顧慮することなく取り扱われ、次にはこれを顧慮してもう一度取り扱われていたのである。このような取り扱いを改め、一般にこの篇全体を著者の拡大した視野に対応するように書き直すことが必要だった。こうして第8稿ができあがったが、それは4つ折り版でわずか70ページの1冊だった。しかし、これだけの紙面にマルクスがどれだけのものを圧縮することができたかは、印刷された第3篇から第2稿からの挿入部分を取り去ってみればわかるであろう。

この原稿も対象を暫定的に取り扱っただけのもので、その取り扱いにさいしてなによりも肝要だったのは、第2稿に比べて新たに得られた諸観点を確立し展開することであって、新たに言うべきことのなかった諸点は顧慮されていない。もともと多少は第3篇の領域に侵入している第2篇第17章の重要な一部分も、再び取り入れられて拡大されている。論理的な連続はしばしば中断され、所々に論述の切れたところがあり、ことに終わりのほうはまったく断片的である。しかし、マルクスの言おうとしたことは、あれこれの仕方でのなかに述べられている。」(K, II, S. 12)

このような第8稿を、エンゲルスは第3篇で徹底的に利用した。第8稿のなかで現行版に使われなかった部分のごくわずかでしかない。そのまま使うことがむずかしいと思われた部分も大きく手を入れながらなんとか残そうと努力をしている。他の諸稿についても言えることであるが、エンゲルスはもちろん、マルクスの草稿に大幅に加筆をしたり、場合によっては大きく書き直しをしたりできる立場にあった。じっさい、どこでもそうする仕方です「編集」をするほうが、彼にとってどんなに楽であったことであろう。しかし、じっさいのエンゲルスの作業は、マルクスの書いたものを極力生かそうとする努力の連続であったように思われる。そうでありながら、きわめて多くの加筆・訂正を行なっているのは、彼にとっての課題は『資本論草稿集』を刊行することではなくて、労働者階級の武器としての『資本論』全3部を完結させることだったからである。エンゲルスが、しなくてもいいことをしたとか、やりすぎたという非難をする人々には、なぜ晩年のエンゲルスが病みがちな身体を鞭打って、自分自身の仕事は後まわしにしても、『資本論』第2部・第3部の完成と刊行とを急いだのかは、けっして理解できないであろう。それはともかく、この第8稿の利用ぶりにはそのようなエンゲルスの心づかいが伝わってくるようなところがある。こうして、4つ折り版70ページから、現行版第3篇の約75%がつくられたのであった。残りの25%は言うまでもなく第2稿からのものである。

8 「蓄積と拡大再生産」(『資本論』第2部第21章)の草稿について(上)

ここに、第2稿および第8稿のどこの部分が現行版の第3篇のどのページに利用されているかを示す一覧表を掲げておこう。²⁾

現行版第3篇と第2稿および第8稿との対応

章	節	現 行 版		第 2 稿 ペ ー ジ	第 8 稿 ペ ー ジ
		表	題		
18		緒 論			
	1	研究の対象		351—354	130—131
	2	貨幣資本の役割		354—358	131—132
19		対象についての従来の諸論述			
	1	重農学派		359—362	1—2
	2	アダム・スミス		362—388 373注40	3—16 135
	3	それ以後の人々		388—390	138—141 の所々から
20		単純再生産			
	1	問題の提起		391 391—392 392—393 393—394	142 16 16
	2	社会的生産の2つの部門		394—396 396—397	142—143 16
	3	両部門間の転換。I(v+m)対IIc		397—401	16—18
	4	部門IIのなかでの転換。必要生活 手段と奢侈手段		401—410	18—23
	5	貨幣流通による諸転換の媒介		410—420	23—27
	6	部門Iの不変資本		420—423	145—146
	7	両部門の変資本と剰余価値		423—427	147—148
	8	両部門の不変資本		427—431	150—151
	9	アダム・スミス、シュトルヒ、ラ ムジへの回顧		431—434 434—435	152—153 153
	10	資本と収入。変資本と労賃		435—446	42—45 48—50
	11	固定資本の補填		446—465	27—37
	12	貨幣材料の再生産		465—469 470—472 472	38—40 40
				472—473	160

			473		40
			473—474	160	
			474—476		40—42
21	13	デステュット・ド・トランの再生 産論	476—484	164—167	
		蓄積と拡大再生産			
	1	部門Ⅰでの蓄積	485—497		46—47
					51—55
	2	部門Ⅱでの蓄積	497—501		55—58
	3	蓄積の表式的叙述	501—517		59—71
	4	補遺	517—518		71

第8稿から現行第3篇以外のところに利用された唯一の部分は第8稿の76—77ページであって、現行版第6章の第2, 3, 4パラグラフに対応している（ただし、77ページはIISGには存在しない）。

次にIISGに保管されている草稿そのものについて若干のことを記しておこう。まずIISGの現行『目録』での記載を掲げる。³⁾

A 69 Das Kapital, Bd. II, Manuskript VIII,

nach 1878, deutsch, englisch, französisch, 70 S.

Marx-Pagin., S. 1-76 (S. 56 und 66 überschlagen; 72-75 frei), S. 77 fehlt.

1 S. loser Zettel mit Notizen für S. 65 und S. 69.

この草稿は、エンゲルスの序文に記されているように4つ折り版のノートである。198×312ミリのサイズの紙葉を2つ折りにして綴じたものである。各ページには20本の青色の横罫があるが、褪色のためか、きわめて薄く、フォトコピーにはまったく写っていない。

全ページにページ番号がつけられている。このノートはいまは74ページしかないが、上の『目録』に記載されているように、ページづけをするさいにマルクスは誤って56ページと66ページとを抜かしており、したがって最後のページは76ページとなっている。また72—75ページはページ番号があるだけで、なにも書かれていない。この空白ページのページ番号以外のすべてのページ番号は鉛筆でなぞられている。これはかつてフォトコピー

10 「蓄積と拡大再生産」(『資本論』第2部第21章)の草稿について(上)

を作るさいになされたものであろう。

マルクスのページづけで77ページにあたるページが失われているのは、このノートに表紙がついていないことに対応するものであろう。すなわち、第1表紙および第2表紙(言い換えれば表紙の裏表)とそれにつながっていた第3表紙(これが77ページ)とその裏の第4表紙とが失われているものと推定される。さきにもふれたように、エンゲルスはこのノートの最後の部分を現行版第6章の第1パラグラフのあとに挿入しているが、現在残されている76ページに書かれているのは、MEW版132ページ28行目の„Ebensowenig“までである。現行版でそれに続く9行は、エンゲルスが自分で補ったものではなく、77ページを見ながら書いたものであろう。つまり、エンゲルスが使ったときには、このノートには77ページと78ページ、つまり裏表紙がついていたことになる。そしてこの裏表紙はとうぜん表紙とつながっていたはずであり、したがって、このノートにはもとは表紙もついていたということになる。その傍証としては、このノートの1ページ目にはエンゲルスの手によるノート番号や日付などの記入がまったくないことをあげることができるであろう。エンゲルスは第8稿以外のIISGに現存する1877年以降のどの草稿でも、その最初のページになんらかの覚え書きを記しているが、この第8稿ではそれは、失われてしまった第1表紙に書かれていたのであろう。⁴⁾

ノートの綴じ目はマルクスのページづけで36ページと37ページとのあいだにあり、しっかりした綴じ糸がついている。また、マルクスのページづけで2ページと3ページとのあいだには、裏表2ページが切り取られたあとの切り口がある(この紙葉はマルクスのページづけの73—74ページにつながるものである)。ていねいな切り方でなく、表側(つまりももとの3ページ目)には3箇所ほど行頭の文字の断片が残っている。裏側(つまり4ページ目)にはなにもみられない。この切り取られた2ページと失われた4ページとを加えると、このノートははじめ20枚の紙葉から成る80ページのノートであったことになる。

このノートのほかに、『目録』にあるように1枚の独立の紙片が、第8稿に属するものとされている。それは、草稿65ページとそれに内容的に接続する69ページとでの表式展開のヴァリエーションである。この紙片の大きさは112×180ミリで、上端はさらに大きな紙から切り取ったことを示すやや雑な切り口となっている。紙質は明らかに上述のノートのそれとは異なるもので、野はまったくはっていない。

ノートの各ページは、野を無視して黒インクでぎっしりと書きつめられている。各ページ平均約45行で、多いページでは50行もある。表式を含むページ、ことに表式展開を試みているページでは行数はやや少なくなっている。2ページの下方約1/3、50ページの下半分、71ページの下方約1/3は空白となっている。

ノートの全ページに鉛筆で „CS“ という書き込みがあり、ペラの紙片には „HJ 94“ という書き込みがある。どの草稿にもみられるこの種の記号は、ランカウ氏によると、ドイツ社会民主党のアルヒーフにあった時期にモスクワのML研のためのフォトコピーを作成するさいの整理番号として書かれたものだとのことである。また、約半数のページに、IISGの印が押されている。

次項で取り扱う「蓄積と拡大再生産」以外の部分もさらに調査のうえなんらかのかたちで紹介したいと考えているので、ここではそれらについての説明は省くことにする。⁵⁾

- 1) MEWの第19巻(1962年刊)に付された年譜では、1880年1月—12月に、「マルクスは、『資本論』第2巻と第3巻との執筆にあたり、第2巻第3篇の新しい異文を書いた」とされている(MEW, Bd. 19, S. 614)。また、1970年に発表されたグリゴリヤーンの論文では、「1880—1881年執筆」としている(C. М. Григорьян, *К вопросу о рукописях П Тома “Капитала” К. Маркса*, 《Институт Марксизма-Ленинизма при ЦК КПСС, Научно-информационный бюллетень сектора произведений К. Маркса и Ф. Энгельса》, № 19, 1970, стр. 171)。この点については、田中真晴氏がすでに言及されている(田中真晴「晩年のマルクス覚え書」、『経済論叢』第109巻第1号, 1972年, 158ページ)。

12 「蓄積と拡大再生産」(『資本論』第2部第21章)の草稿について(上)

- 2) 第2稿中の第3章、すなわちのちの第3篇にあたる部分については、水谷謙治氏と名和隆央氏が、モスクワML研での水谷氏の同稿解読文の調査にもとづいて詳しく紹介されている。そのなかで名和氏は「第2稿と現行版第2部第3篇との対応」と題する表を作成されているが、わたくしがここに掲げた表は、名和氏の表に第8稿中の対応部分を加えたものとなっている(水谷謙治・名和隆央『『資本論』第2部第2草稿(『第3章』)の未公開部分について——その概要と解説——』、『立教経済学研究』第33巻第1号, 1979年, 149ページ)。ただし、いくつかの部分は、名和氏の表よりも細かく示しておいた。
- 3) ここで現行『目録』というのは、IISGの『マルクス=エンゲルス遺稿目録(Inventory des Marx-Engels-Nachlasses)』のことである。このうち『資本論』に直接関係するものについては、佐藤金三郎氏による紹介がある(佐藤金三郎「アムステルダム・社会史国際研究所蔵『資本論』関係資料について」、『経済学雑誌』第63巻第2号, 1970年)。またこの現行の『目録』ができあがるまで同研究所で使われていた旧『目録(Marx-Engels Inventar)』も、その大部分が川鍋正敏氏によって紹介されている(川鍋正敏「国際社会史研究所蔵マルクス・エンゲルスの草稿および読書ノート目録」、『立教経済学研究』第20巻第3号, 1966年)。
- 4) 表紙がなかったためであろう、前注に記したIISGの旧『目録』を作成する時点では、この草稿が第2部の第8稿であることがまだつかまっていなかった。旧『目録』では次のように記載されていた。

B 130 Quesnay's Tableau Économique etc. 2 S.

A. Smith ch. III. b. II. 45 S.

Destutt de Tracy 3 S.

A. Smith. contin. 19 S.

Nehmen wir den Kreis, Prozess d. Kapitals in seiner einfachsten Form... 1 S.

Heft, 74 S. 8°. numm., 4 S. nicht beschrieben. (viel korrig. Ms. von M.) (1877)

この記載のうち最初の2ページとは、マルクスのページ番号で1—2ページ、次の45ページは同じく3—47ページ、次の3ページは48—50ページ、次の19ページは51—71ページ(56, 66ページは欠)、最後の1ページは76ページ、をそれぞれ意味している。この記載は、当時はこの草稿の内容がほとんどつかまっていなかったことを示している。

第2行の „ch. III. b. II“ というのは、この第8稿の1ページの最上部に „Ch. III, b. II“ と書かれているところから取ったものであろう。しかしこれ

もまっく見当違いの記載である。これは『資本論』の「第2部第3章」と読むべきものである。ただこの点については、なぜマルクスが「第2部第3篇」としないで「第3章」と書いているのかという疑問が残る。形式的には、(1)この草稿がじつは3篇構成確立以前のもの、すなわち第5稿以前のものであるか、(2)いったん確立した3篇構成をまた3章構成にもどしたのか、(3)たんなる書きまがいがいか、といった可能性を考えることもできようが、ここではただ第2部第3篇を言い表わすのに簡単に „Ch III, b. II“ としておいたということにすぎないものとする。

- 5) ただひとつのことだけはここに述べておこう。マルクスは第8稿以前には、消費手段生産部門を第I部門、生産手段生産部門を第II部門と呼んでいたが、この第8稿では一貫してその逆の呼びかた、つまり生産手段生産部門を第I部門、消費手段生産部門を第II部門と呼んでいる。この点では、第8稿を現行版に取り入れるさいに、エンゲルスはなんの手も加えていないのである（もちろん表現上の改善や誤記の訂正は行なっているが）。「対象についての従来の諸論述」のうち「アダム・スミス」のところですでに2部門分割についての言及をみることができるが（K. II, S. 365—368）、この部分も基本的に草稿の叙述（S. 8）と一致している。このあとさらに、16ページで表式を示しており、これは現行版の「第20章 単純再生産」の「第2節 社会的生産の2つの部門」に取り入れられている。エンゲルスは、「印刷された第3篇から第2稿からの挿入部分を取り去ってみれば」云々と書いているところからわかるように、第3篇は基本的には第8稿から、そしてそれに第2稿を「挿入」する、と考えているのであって、そうしたエンゲルスにとって、第2稿を第8稿に合わせて書き直すのはまったく当然のことであった。エンゲルスが第I部門＝生産手段生産部門、第II部門＝消費手段生産部門として全体を統一したことをもって、なにか必要以上のことをしたかのように言うとするれば、それはまったくあたらないであろう。また、この変更の理由を、マルクスの拡大再生産研究のなかにもみ求める根拠もないように思われる。

2 「蓄積または拡大された規模での生産」にかんする叙述について

第8稿のなかで拡大再生産が論じられているのは、46—47ページと、3ページ飛んで51ページから71ページまでと、独立のペラの紙片である。その冒頭には、「II）蓄積または拡大された規模での生産」という表題が書

14 「蓄積と拡大再生産」(『資本論』第2部第21章)の草稿について(上)

かれています。この表題そのものは以下の本文を書くまえにまず書かれたものであることは明らかであるが、「II)」という数字の部分は、前後の文字のあいだに割り込むように書かれており、直前の語——これについてはすぐ言及する——の末尾とやや重なっているため、あとから書き加えられたものと推測される。このII)に対するI)は、内容的には「単純再生産」をさすものと考えられるが、それに該当する「I)単純再生産」という表題は第8稿中には存在しない。しかし、現行版の第19章「対象についての従来の諸論述」の第2節「アダム・スミス」の冒頭にあたる部分(K. II, S. 362; 草稿, S. 3)には、「I)」と書かれている(鉛筆で大きな字であとから書き込まれている)。これがおそらくII)にたいするものであろう。この2つの数字はどちらもあとから書き込まれたものようであるが、内容的にはすでに拡大再生産についての本文のなかでこの拡大再生産に関する部分と区別して「I)では」云々と書いているので、全体を書き終えてからI, II)とすることにしたのではないであろう。

上の表題の同じ行のすぐまえには、「先取り〔anticipirt〕」と書かれているが、これは、当該部分の前述のページの飛びと関係がある。草稿では、現行版の第20章第10節「資本と収入。可変資本と労賃」にあたる部分が42ページから50ページにかけて書かれているが、その中途の46—47の2ページに、「蓄積または拡大された規模での生産」が「先取り」して書きはじめられたかたちになっているのである。内容的にはこの部分はもちろん、50ページのあとに来るべきものである。ただし、このことは、執筆のさいにも実際に「先取り」して書かれたことを意味するものではない。むしろ、その逆であるように思われる。すなわち、この「先取り」部分の2ページは表裏の2ページではなくて見開きの2ページであること、および、その前後の部分——45ページ末尾および48ページ冒頭——には飛びないし連絡の指示や覚えがまったくなく、この2点からみて、ページをめくるさいに誤って飛ばしてしまった2ページをあとから利用したものであろうと推定できる。したがって記述の内容について考える場合には、この前

後関係は考慮の外に置いてよいということになる。

次に表題そのものについてみると、現行版での表題「蓄積と拡大再生産 [Akkumulation und erweiterte Reproduktion]」とは、第1に「拡大再生産」ではなくて「拡大された規模での生産」となっている点で、第2に「拡大された」の語が *erweitert* ではなくて *vergrössert* となっている点で、第3に「と [und]」ではなくて「または [oder]」となっている点で、異なっている。このうちの第1の点は、マルクスも本文のなかで両者を同じ意味で使っているのであって、「拡大再生産」の表現は短縮の役に立つであろう。第2の点であるが、じつは「拡大された」というときに *vergrössert* という語を使っているのは、拡大再生産を論じている部分全体のなかで、この表題と最初のパラグラフ中の1個所だけでしかない。それ以降は一貫して *erweitert* を使っている。そのほうが適切と感じたためであろう。したがって、エンゲルスが *erweitert* を用いているのは当然である。しかし第3の点については疑問がないわけではない。最初のパラグラフでマルクスが言うように、「現実の蓄積とは拡大された規模での再生産である」のであり、しかもここの表題での「蓄積」はまさにその「現実の蓄積」なのであって、「蓄積」と「拡大再生産」とは相並ぶ別物なのではなく、同じものを言いかえたのにすぎないからである。「または」の *oder* は、「すなわち」、「いいかえれば」の意味である。この第3の点については、エンゲルスの表題よりもここでのマルクスの表題のほうがマルクスの考えをより正確に表現するものと言えるであろう。

本文にはいると、まず注目しなければならないのは、現行版の表題がすべてエンゲルスによるものだけということと、それらの表題はマルクスの叙述の流れを部分的にしか反映していないのではないかと、ということである。これは、もっと適切な区分と表題があったのではないかと、ということを直接に意味するものではない。そういう区分と表題があるかもしれないし、それを考えてみることに意味がないとは思わないが、ここでの問題はむしろ、マルクスのここでの叙述の全体がそもそも体系性を欠いており、

16 「蓄積と拡大再生産」(『資本論』第2部第21章)の草稿について(上)

きちんとした組立てをもつ区分とそれにみあう表題とを受けつけにくい性質のものだ、ということである。まさに、「論理的な連続はしばしば中断され、所々に論述の切れたところがある」(K. II, S. 12)なのである。私事にわたるが、わたくしはかねてから現行版の第21章の各表題は現行版の本文からみてもどうもそぐわないところがあり、不適切なのではないかと感じていた。リュベルの書いているところなどで、これらの表題はエンゲルスがつけたものだと考えてはいたが、しかしそれでも他方では、エンゲルスのその表題づけにはやはり相当の——マルクス自身の残したのものによる——根拠があるのではないか、という思いを捨て切れなかった。そしてそれはまた、本文そのものが多かれ少なかれ当初からの一定の構想のもとに順序だてて書かれたものだろうという先入感と結びついて、テキストの個々の叙述にたいしてすなおに疑問を出すことを妨げていた。そしてそのことがかえって、全体の叙述の流れを、したがってまたその流れのなかで個々の部分の意味を、とらえることをむずかしくしていた。しかしこのたびの第8稿との対面で、もちろん全部とはいかないが、かなりの程度までもやもやが消え、第21章についての見通しがきくようになったと感じている。その大きな要因の1つが、内部の各表題をまったく無視することができるようになったということなのである。マルクスの草稿では、表題らしいものはただ1箇所、草稿の57ページ、MEW版で499ページの、第2節「部門Ⅱでの蓄積」中の横線のあとのところに、「5) 部門Ⅱでの蓄積」とあるだけである(この位置がエンゲルスのそれとは異なっていることも、よく納得がいく)。あとは、数字と記号をつけているパラグラフがあるほか、そのまえの叙述との区切りを示すための横線がときどきひかれているだけである。その数字と記号というのは、現行版の冒頭パラグラフにあたる部分に「1)」と書かれ、以下、第3パラグラフに「2)」、第1節の冒頭パラグラフに「3)」、第2節の冒頭パラグラフに「4)」、いま述べた「部門Ⅱでの蓄積」という表題のまえに「5)」、そしてこの5のさらに下位の区分として、次のパラグラフに「a)」、第3節の途中、MEW版の

503 ページの 1 行目にあたる場所に「b)」、とそれぞれ書かれているものである。

さて、全体の区分と表題づけを別にして、本文を読んでいくと、エンゲルスがマルクスの文章に驚くほど細かく手を入れていることがわかる。しかしそれは、ドイツ語原文でみるのと日本語訳文でみるのとでは、まったく程度が違っている。原文では、ほとんど大半の文章のどこかに筆が加えられている。訳文では、むしろ内容的に変わらない部分が大半であることがわかるであろう。エンゲルスは書いている。

「材料の主要部分が、大部分は事実上は仕上げられていたとはいえ、文章としては仕上げられていなかった。それは、マルクスが抜き書きをつくるときにいつでも用いていたような文章で書かれていた。だから、文体はぞんざいであり、表現も行文もくだけたもので、しばしばひどくふざけた表現や言いまわしがまじっている。……章の終わるところでは、次の章に移ることを急ぐあまり、しばしばただわずかばかりのきれぎれの文章が、そこに未完のまま残された展開の境界石になっているだけである。……私は、原稿をできるだけ原文のとおり再現し、文体についてはマルクス自身も改めたであろうと思われる点だけを改め、説明のための書き入れやつなぎの文句は、どうしても必要でしかも意味のうえからまったく疑問の余地がない場合に限って挿入するということだけで満足した。その解釈にほんのわずかでも疑問の残った文章は、むしろまったく原文どおりに印刷されてある。」(K. II, S. 7)

一見、いたるところで筆を加えているように見えながら、そのきわめて大きな部分が、文体上の修正となっている。エンゲルスはたいていの場合、マルクスの原文の意味を変えないように苦心しながら、文体上の——あるいはしばしば語彙の——修正をはかっているのである。マルクスの原稿にたいするエンゲルスのこの尊重は、真の理論的労作が実践にとってもつ意味への彼の確信と、彼の謙虚さ、良心を十分に伝えるものである。わたくしは、このたびの作業のなかで——マルクスの努力についてはいうまでも

18 「蓄積と拡大再生産」（『資本論』第2部第21章）の草稿について（上）

ないが、同時に——エンゲルスの仕事ぶりになんとも深い感動を覚えずにはいらなかった。

とはいえ、あちこちでエンゲルスは、訳文にも変更をもたらすような書き換え、書き加えを行なっている。それらの加筆のタイプを調べてみるのも興味がないわけではないが、ここではそれだけの余裕はない。また草稿と現行版との相違についていちいち記している余裕もない。次項での訳文と原文を現行版のそれらと対比していただければいいことなので、本稿ではその作業は断念した。しかし、それでも一言しておきたいのは、それらの変更や加筆を不要なもの、マルクスの論旨を誤って伝えるもの、と一方的に評価してはけっしてならない、ということである。もちろん、エンゲルスが、マルクスの叙述の真意をつかみきれなくてマルクスの原文を改悪している場合もあろう。またエンゲルスとしては読者への親切のつもりでつけ加えたつなぎや敷衍がかえって原文の流れをわかりにくくさせている場合もあろう。しかし、エンゲルスの加筆なしにいきなり草稿を読んだとしたら理解できなかったであろう箇所も少くないと思われるし、またエンゲルスの加筆によって、そこでマルクスが明示的には書いていない豊かな思想内容がつかみだされている場合もあるであろう。

たとえば、現行版第1節の2のなかには、次のような記述がみられる。¹⁾

「単純再生産の場合には、剰余価値の全部が収入として支出され、したがって商品Ⅱに支出されるということが前提された。したがって剰余価値Ⅰは、不変資本Ⅱcをその現物形態でふたたび補填すべき生産手段だけから成っていた。そこで、単純再生産から拡大再生産への移行が行なわれるためには、部門Ⅰでの生産は、Ⅱの不変資本の諸要素をより少なく、しかしそれだけⅠの不変資本の諸要素をより多く生産できるようになっていなければならない。この移行は必ずしも困難なしに行なわれるものではないが、しかし、それは、Ⅰの生産物のあるものがどちらの部門でも生産手段として役だつことができるという事実によって、容易にされるのである。」(K. II, S. 432)

この個所は、草稿の53ページのはじめのほうの個所にあたるが、そこには、最初の2つの文章はあるが、「そこで」以下の文章はない。「そこで」以下は、エンゲルスの文章なのである。しかしこのつけ加えないし書き替えは、草稿のこの部分のなかでマルクスが明らかにしようとしているいくつかの点のうちの1つを、明示的に取り出したものとして、きわめて適切かつ重要なものであると考えられる。「単純再生産から拡大再生産への移行」という問題はマルクスのテーマの重要な一半をなしているが、マルクスはこの表現を使っていないのである。この事実から、「移行」という表現はエンゲルスの書き加えにすぎないのだから、それはマルクスの展開とは無関係だったことがはっきりした、といった結論を導きだすひとがあるかもしれない。しかし、もしそういうひとがあるとすれば、そのひとはそれによって同時に、次のように言明することになるわけである。すなわち、マルクスが「蓄積と拡大再生産」の章のなかでまったく書いていない事柄をマルクスのこの章での「含意」だとして「展開」してみせることは、さらにそれ以上にマルクスとは無関係な地点に立つものである、と。

もちろん、マルクスの原文を見てはじめて、なるほどそうだったのか、と納得がいくところも少くない。たとえば、いま現行版から引用した個所の次の文は、現行版ではこうなっている。

「したがって、——単に 価値の 大きさだけから見れば——単純再生産の内部で拡大再生産の物質的土台が生産されるということになる [Es folgt also, daß—bloß dem Wertumfang nach betrachtet—innerhalb der einfachen Reproduktion das materielle Substrat der erweiterten Reproduktion produziert wird]。」(K. II, S. 492)

このままでは、「単に価値の大きさから見れば」というのはそれ以下の全文、あるいは「生産される」にかかると読むほかはないが、内容的には「単純再生産」にかかると考えるべきところだとこれまで考えてきたのであるが、マルクスの原文ではこうなっていたのであった。

「したがって、単純再生産——たんに 価値の 大きさから見れば——の

20 「蓄積と拡大再生産」(『資本論』第2部第21章)の草稿について(上)

内部で、拡大された規模での再生産の、現実の資本蓄積の、物質的土台が生産されるということになる〔Es folgt also, dass innerhalb d. einfachen Reproduktion—bloss dem Werthumfang nach betrachtet—d. materielle Substrat der Reproduction auf erweiterter Stufenleiter, d. wirklichen Kapitalaccumulation, producirt wird〕。(第8稿, 53ページ)

この場合には、エンゲルスの手入れはかえって文意を損うことになっているといえるであろう。

さてそのほかの細かい点はすべて省略して、この「蓄積または拡大された規模での生産」のなかでエンゲルスが最も取り扱いに苦慮したと思われる、そしてまた第8稿のなかでは唯一の例外的取扱いとなっている部分に話を進めよう。²⁾ それは、現行版でエンゲルスが第3節「蓄積の表式的叙述」としている部分、とくにその「1 第1例」以降の部分である。エンゲルスの表題を見ると、「部門Ⅰでの蓄積」と「部門Ⅱの蓄積」を考察したので、こんどはそのうえで蓄積の過程を表式を用いて示してみよう、ということになる。マルクスの叙述がそのように進められているかどうかには疑問があるが、その点はひとまずおくことにしよう。ともあれエンゲルスはここまでは、マルクスの文章に手を入れ、加筆しながら進んでくることができた。ここまではマルクスの文章の大部分がなんらかのかたちで取り入れられてきた。第3節にはいっても、「1 第1例」の前までは——おそらくマルクスの叙述に疑問をもちながらも——マルクスの叙述について進んできた。ところが、第1例を書き進めていくと、はじめはマルクスの表式展開の数字の——あるいは計算の——誤りを訂正すればなんとか進めたものが途中からそうはいかなくなってきた。というのは、マルクスの叙述の流れはマルクスの誤った数字を前提にし、それとしっかり結びついてきたからである。MEW版の506ページのあたりもかなりの変更を必要としたが、507ページの後半あたりからは(さらにについてにつけくわえれば514—515ページも)、エンゲルスは数字も説明もすっかり自分で

書かなければならなかった（また後のほうでは、マルクスの記述をかなり大きくカットしなければならなかった）。そしてなんとかかたちだけはマルクスのやっているのと同じような仕方でも5年間の展開を終えることができた。かたちだけは！ というのは、エンゲルスの展開をみると、ここではI部門の蓄積率を50%とし、その他の諸比率もすべて一定としておいて、過不足のない補填が行なわれて再生産が進行する経過を表現しているだけであって、そこからなんらの結論も引きだされてはいない。「第1例」とはそういうものであった、と読者は読むであろう。しかし、マルクスの表式展開はそうではなかった。展開を5年間にわたって行なって6年目にはいったところでそこから1つの結論を引き出している。「これは、資本主義的生産の進行とは矛盾している」（第8稿、64ページ）と！ これは表式展開に適切でないところがあったにちがいない——こうマルクスが考えたかどうかは別として、マルクスは新しい数値をおいて展開をやり直そうとする。これもうまくいきそうもない、そこでこんどは剰余価値率を変化させて展開してみようとする。このあたりでは、病気のせいも、マルクスの数字の計算も、数字を書くのも、書いた数字を読み取るのも、さらに表式的前提を守ることも、また展開のしかたそのものまでも、誤りや混乱を含むようになっていく。そうして、こうした試みも成功しないまま、あらためて出発点を置き直して、現行版で「2 第2例」とされているところにはいって行くのである。したがって「第2例」とは、「第1例」とその続きとの試みの失敗をやり直しているものなのである。エンゲルスは、マルクスの失敗した展開とその結論、そして再度の不成功の試みの部分を——当然のことであるが——全部削除し、自分の表式展開だけを置いた。その結果、マルクスの思考の流れは見えにくくなってしまっているのである。

ところで、「これは、資本主義的生産の進行とは矛盾している」、とマルクスが書いているのは、5年間にわたる展開のうちに、出発点よりも資本の有機的構成が低下してしまっていることをさしている。しかしこれは、

22 「蓄積と拡大再生産」(『資本論』第2部第21章)の草稿について(上)

マルクスの感ちがいと表式展開のさいの誤りの結果とが二重の原因として働いた結果生じたものであった。第1にマルクスは得られた結果を「単純再生産の表式」での資本構成と比較しているが、これはおかしい。拡大再生産のための「出発表式」に配列を変えたときに有機的構成を低下させているのであって、比較するとすれば、「出発表式」とでなければならない。第2に、表式展開のさいに、「出発表式」ではI部門の資本構成が $v:c=1:4$ であったのにマルクスの展開では以降のI部門の蓄積はつねに $1:3$ の割合で行なわれている。I部門の資本構成も総資本の有機的構成も下がるのはあたりまえなのである。第3に、ここでのマルクスの展開が——じっさいにそうはなっていないがマルクスはそのつもりであったと思われるように——両部門の資本構成も追加資本の構成もそれぞれ一定という前提を守り、しかもマルクスのしかたで過不足なく計算を進めるならば、2年度以降の部門間比率は一定となり、したがって総資本の有機的構成も一定となるのであり、また、初年度から2年度にかけての総資本の有機的構成の変化は、——マルクスの方式によるかぎり——I部門の蓄積率とそれによって決定されるその年度のII部門の蓄積率との関係によって決定される部門間比率の変化にかかっているのであるから、マルクスが前提を守ってミスを犯さずに計算を続けていたならば、彼は別の結論に達したであろうし、その場合にはまた、その後の叙述も異なったものになっていたかもしれないのである。

マルクスがこのような試行錯誤の過程を辿っているのをみると、それはほかの部分についても、これまで不可解であった個所がじつはマルクスの試行錯誤を表わしていたのではないかと、見直してみる目を開いてくれる。少くともわたくしについてはそうであった。

マルクスは「蓄積の表式的叙述」のところで、表式aをつくり、拡大再生産をこれで考察しようと言い、I部門でもII部門でも蓄積率50%として、I部門での追加不変資本と追加可変資本との大きさを確認したところではたと筆を止め、「われわれはここで1つの新しい問題にぶつかるのである

が、……日常的な理解にとっては、このような問題があるということだけでも奇妙だと思われるにちがいない」(K. II, S. 503 ; 第8稿, S. 59)として、つまるところ、Ⅱが売らずに買うことのできる「貨幣源泉はⅡのどこでわき出するのか?」と問題を立て、以下「第1例」のまえまであれこれと検討をしていく。わたくしにはこれまで、こうした叙述の流れがどうも不可解でならなかった。なぜこういう筋道で論じなければならないのかがよくわからなかった。蓄積の進行のさいの貨幣資本の積み立てとそれに伴う追加貨幣の必要、またそのための「貨幣源泉」、というのは、たしかに拡大再生産を論じるさいの1つの重要な論点ではある。しかしここでの問題提起ははたしてそういうものであろうか? マルクスはせっかくだつて表式aはもうそのままにしまって、「第1例」で新しい「出発表式」をつくって表式を展開する。なぜなのか? 第8稿を見てはじめて得た結論はこうである。<両部門の蓄積率を任意に取った場合には過不足のない両部門の転換は偶然の場合にしかできないことにマルクスは気づかないで表式展開をしようとした結果行きづまり、その打開策として一方的購買をもちださざるをえなかったのだ>ということである。表式aについて言えば、両部門の蓄積率がともに50%では、過不足のない転換=補填は不可能である。どちらかの部門の蓄積率を他部門の蓄積率によってきまるものとするか、過不足のない転換という前提を置かないことにするか、そのどちらかでしかない。マルクスはここでは後者を取った。しかしその場合には表式を展開してみる意味の過半は失われてしまうであろう。そこで「第1例」以降では——しばしばミスは犯しながらも——過不足のない転換を前提し、そして「第1例」では第Ⅰ部門の蓄積率を50%として与えられたものとし、第Ⅱ部門の蓄積率はそれによって規定されるものとしたのであった。このように読むとき、マルクスの叙述の流れはまことに自然であり、得心のいくものとなる。そして、このような視点をもってこの第21章の全体を読み返すと、それは最初に全体の構想をもって書き始めたものでないどころか、まさにその正反対のものであること、マルクスが「蓄積または

24 「蓄積と拡大再生産」(『資本論』第2部第21章)の草稿について(上)

拡大された規模での生産」について解明しなければならないと考えた重要な問題を自ら設定しては解き、あるいは行き詰って他に方向を探る、という苦闘の跡を記録したものなのだということがわかってくるように思われるのである。

したがって、この第21章の部分はとりわけ、個々の叙述にとらわれることなく、この全体のなかでマルクスはどういう問題を立てているのか、そしてまたそれになにをもって答えようとしているのか、ということを読み取る必要がある。すでに以前に論じていたことの繰り返しや、ほかの部分に属する問題であることを彼自身が述べているところや、岐論とみるべき個所などをいちおう視野の外におき、まさにこの「蓄積または拡大された規模での生産」で解明されている固有の問題はなにか、を明らかにする必要がある。そして得られたものが、マルクスの拡大再生産論なのであって、それに含まれていない問題についての議論をマルクスの「含意」であると称するのは、誣いものといわれねばならないであろう。それはともかく、第8稿の原文は、現行版ではかくれてしまっているマルクスの試行錯誤の過程をも露わにすることで、かえってマルクスの本来の課題と彼の思考の流れとをつかみ易くしてくれるように思われる。マルクスが多かれ少なかれ当該の個所にとっての岐論として角括弧に入れていた部分を、エンゲルスはしばしば本文のなかに組みこんでいる。また——そうせざるをえなかったことはよく理解できるが——エンゲルスはマルクスの下線による強調を再現していない。現行版にあるわずかの強調はまさにエンゲルスによる強調であって、草稿では逆に強調されていない場合が多い。これは強調の意味のちがいがから生じることである。このような角括弧や下線も、マルクスの思考をとらえる一助となることであろう。

以上、やや感想めいたこともつけ加えたが、第8稿中の第21章該当部分の、現行版に対比しての一般的な特徴づけを行なった。内容的に論じてみたいこと、たとえば、エンゲルスが「第4節 補遺」としている個所は「補遺」であるどころかこの拡大再生産の論述の1つの筋道にたいするいちおうの

結論となっている、ということであるとか、貨幣流通の媒介をはじめからいっしょに論じることの意味とか、さらに大きな問題としては、さきにもふれた、ここでの固有の問題はなにかということ、またそれに関連していわゆる「内在的矛盾」がこのなかで論じられていると考えることができるのかということなど、ここではすべてを読者の研究に委ねることにしよう。

- 1) この部分をとくに取りあげたのには、次のような理由もある。IISGには、エンゲルスがマルクスの諸草稿からつくりあげた第2部の原稿が保存されている。この原稿は印刷所に送られた清書稿ではなく、そのまえの段階のものである。これは、はじめのわずかの部分をエンゲルスが書いたほかは、ほとんどアイゼンガルテン (Oskar Eisengarten) に口述筆記させたものである。しかし、エンゲルスは、アイゼンガルテンに筆記させた原稿にあとからさまざまの手を加えている。この第21章にあたる部分でもそうしているが、そのなかでかなり大きく書き変えないし書き加えをしているところが10数箇所ある。そのうち内容的にみて重要な書き変えと考えられるのが、この「移行」のパラグラフなのである。このほか、内容的な書き加えをしているのは、現行版の「蓄積の表式的叙述」の「第1例」の直前で、マルクスが「云々、云々」と書いているのを内容的に補足しているところである (第8稿, 61ページ; K. II, S. 505)。それ以外は、短縮のための書き変えか、表式展開の部分での大きな手入れである。
- 2) ここで「唯一の例外的取扱い」と言ったのは、第8稿中でこれほどエンゲルスが全面的に書き直しをし、またかなり大きく削ってしまったところがほかにないからである。この表示展開の部分では、エンゲルスははじめマルクスについていこうとするが、やがてそれができなくなり、ついに自分で数字をつくらなければならない。また、草稿の64ページから65ページにかけて青鉛筆で大きく抹消線を引いて、この部分の取り入れを断念しているのである。

3 「蓄積または拡大された規模での生産」の内容

本項では、第8稿中の21章該当部分の細目的な把握を試みる。すなわち、まず草稿の各パラグラフの内容を日本語で記し、そのあとにそれを読まれるさいの参考として、草稿からの解説文をつける。本稿の性質上パラグラフごとに見ていくことにしたが、第8稿に含まれている拡大再生産にかんする叙述は、原文でも訳文でも——抹消されている部分は別として——、本項にすべて含まれているはずである。注としてつけ加えたのは、

草稿の状態にかんする報告、原文の文法的不整合についての疑問、マルクスの明らかな誤記と思われるものの訂正、とくに表式の展開のなかに見られる混乱についての指摘、解説不能の部分や解説に確信がもてない部分の指示、訳語・訳文についての若干の説明、などである。¹⁾

はじめに、訳文と解説文とを読まれるさいに知っておいていただきたいことを列挙しておこう。訳文はもちろん後続の解説文にもとづいているので、まず解説文について、次に訳文について、という順序を取ることにしよう。

解説文作成の原則は、抹消されている部分は別として、草稿のありのままの姿をできるかぎり忠実に写し取るということである。その結果、現行版とは以下の点で異なることになる。

- ① マルクスが当時の慣行の正書法にしたがっている場合には、それがそのまま残されている。たとえば、現在の Ware は Waare, Wert は Werth, konstant は constant, realisieren は realisiren,あるいは現在の zuzufolge は zu Folge, zuwege は zu Weg, 等々。
- ② マルクスの正書法上の動揺はすべてそのままに残し、統一は行なわない。たとえば、Kapital とならんで Capital があり, Produktion とならんで Production があり, Circulation と Cirkulation があり, Funktion と Function があり, Akt と Act があり, blos と bloss があり, jetzt と jezt があり, Fonds と Fond がある, 等々。
- ③ マルクスの正書法上疑問がある癖のようなものも、誤記とはしないでそのまま残す。たとえば allmählich が allmählig ないし allmällig になっている, など。
- ④ マルクスの句読点は、文末のプンクトと省略符のプンクトとを除いて、すべてそのままにする。マルクスのコンマやプンクトは、はっきりと独立に打たれるのではなく、語末に続けて気持だけ置かれていることも多いので、それらがあるかないかの判断は非常に微妙である。この作業では、はっきりとあることがわかるもの以外は書かれていない

ものとみなした。境界的部分での主観的判断を避けるためである。

- ⑤ マルクスは定冠詞 *der, des, dem, den, die, das* を、文脈からこのうちのどれであるかわかる場合には、一般に *d.* と省略している。また、きわめてしばしば *von* を *v.* と、しばしば *für* を *f.* と省略している。あるいは *constant* や *variabel* を *const.* や *var.* としたり、特別な例としては *Circulation* を *Circ.* としているところがある。これらの、ピントによる省略はすべてそのままにしてある。
- ⑥ マルクスは *c, v, m* のような記号や、それを用いた表式では、きわめて統一を欠いた書きかたをしている。*c, v, m* の大文字か小文字かの判断を除いて、その他の点ではできるだけもとのままにするように努めた。
- ⑦ マルクスの定式 $G_W\dots P\dots W'_G'$ 、等々のなかにある実線と点線とは、マルクスのすべての草稿を通じて各文字の並び線、すなわち *G, W, P* の下端の部分に揃うように書かれている。現在ではこのうち実線は $G-W$ のようにダッシュ (*Gedankenstrich*) で、点線は $W\dots P\dots W'$ のようにピントで示すのがふつうとなっている。これは印刷技術上の要請かと思われるが、本稿ではマルクスのもともとの定式における線をそのまま保存することにした。なお、前述のエンゲルス稿でも、まったく同様の書きかたをしていることもつけ加えておこう。
- ⑧ 明らかに誤記である部分もそのまま残し、ただその旨を注記するようにした。
- ⑨ 原文の括弧類もそのままにしてある。マルクスの角括弧は角括弧 $\langle \rangle$ で示し、下線は——イタリックでなく——下線で示した。ただし片括弧になっている場合には、 $\langle \rangle$ で対応の括弧 (すべて閉括弧) を挿入した。

以上のような原則にもかかわらず、手を加えざるをえなかった点がいくつかある。

- ① 略記のうち、途中の文字を省略しているものについては、すべて略さない書きかたに戻した。マルクスの草稿になじみのない読者には読めない可能性があるからである。たとえば、whd—während, ftwd—fortwährend, Kuf—Kauf, dch—durch, wde—wurde, sft—sofort, Ziehg—Ziehung, Setg—Setzung, figd—folgend, 等々。
- ② mないしnを2つ重ねる場合には、当時の略記法にしたがってマルクスはしばしば \overline{m} ないし \overline{n} と書いている。これはもちろん、mm ないし nn にもどした。
- ③ マルクスは文末であることが明らかである場合、きわめてしばしば、はっきりしたピリオドを打っていない。なかには、コンマと考えるべきかピリオドと考えるべきか、微妙なケースもないではないが、文末のピリオドはすべてつけることにした。
- ④ c, v, m 等の記号はさきに述べたようにできるだけもの状態を再現するようにしたが、しかし、c と v と m の3文字については、明らかに大文字であるものと明らかに小文字であるものほかに、どちらか判断できないものがきわめて多くある。それをいちいち示すのも面倒なので、すべて小文字にすることにした。また部門を示すI, IIの数字は逆につねに大文字と同じ大きさにした。その結果、草稿では C_{II} となっても本稿では c_{II} となっている場合がある。この点だけは原文の状態が再現されていない部分があることを記憶しておいていただきたい。
- ⑤ 判断に迷う微妙な場合は、重要なものについては注記したが、そうでない場合はその場その場で処理した。たとえば、seitens または seiten の語頭のSは小文字と大文字とはほとんど区別がつかない場合が多いので適宜処理せざるをえなかった。
- ⑥ 明らかな誤記でも文字の挿入で処理できるものは < > に入れて訂正した。
- ⑦ 前の文が明らかに終わっているにもかかわらず、次の文が小文字で

始まっているような場合には、原則としてこの小文字を大文字に変えた。

- ⑧ マルクスは改行を示すのに、パラグラフの頭を下げるしかたを取っていない。パラグラフ末に空気を残して改行することで、またパラグラフ末行がページの右端までいっぱいになっているときには、次行の頭をそれまでの行頭よりもすこし左に突き出すことで、示している。しかし本稿では、改行はすべて行頭を下げるしかたで示している。なお、改行かどうか判断に迷う微妙な場合は注記した。また、表式展開のなかなどでは、形式的には改行でも、じっさいには独立のパラグラフとは考えにくいような場合には、いくつかの改行を含む部分を1パラグラフとみなした。

その他の留意点は次のとおりである。

- ① 草稿にはきわめて多くの修正がある。文体上のものもあれば内容上のものもある。それには大きく分けて、たんなる抹消、書き変え、挿入（書き加え）の3つがある。たんなる抹消も書き変えも、ともに抹消線で消されている部分を読みとらなければその内容は把握できない。読みとれる場合もあるが、ループでフォトコピーを見る作業ではそうでない場合がきわめて多い。今回の作業では、抹消と書き変えとは視野の外に置いた。²⁾ ただ挿入だけは、それが「生きている」部分であるばかりでなく、しばしば下線が引かれている部分の途中で行の上に書き加えられていて、そこに下線があるとみなすべきかどうかの判断がむつかしく、しかもこれへの下線をないものとみなせば、もとの連続している下線をこの挿入された語で中断することになってしまう、という事情も考慮して、これを記録することにした。記号はMEGAの付属資料の部での記号にならって、挿入部分の前後に|: :|をつけて示してある。書き変えもしばしば挿入のかたちをとる——ある部分を消してその上に書き加える——が、下に抹消部分をもつ挿入は書き変えとみなすという原則をたてて処理した。その結果、意味の

30 「蓄積と拡大再生産」(『資本論』第2部第21章)の草稿について(上)

上での挿入というよりもたんなる文体上の修正というようなものにまで|:|をつけることになっているが、やむをえない。

- ② 解読不能の部分は×××で示したが、その状態については注記した。解読に確信がもてない部分は、活字を小さくして示してある。
- ③ 解読者の挿入はすべて< >に入れた。
- ④ 草稿のページの指示はMEGAと同じしかたでしてある。すなわち、各ページのはじまるところに|46|のように記し、ページの終わるところに|を記す。その結果、文の途中でページが変わるときには||47|のようになる。なお、本稿のなかでは1箇所あるが、ページの途中から該当部分が始まる場合には/69/のように示す。

次に訳文について記そう。訳文は上述のようにしてできあがった解読文にもとづいているが、以下の諸点に留意されたい。

- ① 訳出にさいして、大月書店版『資本論』第2部第21章(岡崎次郎氏訳)の訳文を利用して頂いたが、若干の語では訳語を変えたほか、訳文を変更したところも少くない。したがって、大月版と異なるところがすべて草稿との違いを示しているわけではない。
 - ② 他方、エンゲルスが単語を置き換えたり、文章に手を入れたりしている場合でも、それがたんなる文体上のものであると判断できるときには、現行版の訳文をわざわざ変えるようなことはしなかった。
 - ③ 原文では不完全な文章になっている場合でも文意が明らかであるかぎりには、補って訳出した。その補いが大きい場合には注記した。
 - ④ 原文が誤記であることが明らかな場合で、しかもそれが訳文にも現われるようなときには、そのまま訳文に示し、注で修正した。訳文では、次の記号を用いた。慣習的に用いられている記号を用いるようにしたので、原文とは違っているところがある。
- ① 解読文では|:|に入れて示した挿入部分は、訳文では《 》に入れて示した。訳文に変更をもたらさないような挿入は無理に示すようなことをしなかった。

- ② 解読不能の部分は原文と同じく×××で示した。
- ③ マルクスが角括弧をつけているところは { } で示した。³⁾
- ④ 訳者の挿入は [] に入れた。
- ⑤ 下線は原文どおりにつけ、疑問がある場合には注に記した。原文ではひと続きになっている下線でも訳文ではいくつかに分かれる場合があることに留意されたい。
- ⑥ ページの指示は原文と同様である。ページの切れ目が文の中途にくるときには、後のページの最初の語の直前をその変わり目とみなした。
- 1) そのなかには、草稿のなかに鉛筆で書かれているものについてのものがある。本稿では、鉛筆(黒鉛筆)、赤鉛筆、青鉛筆で記されている部分は、いちおう第8稿本文以外のものと見なして、すべて注で説明するようにした。そのさい、赤鉛筆と青鉛筆のものはまずエンゲルスのもとのみでまちがいないと思われるし、鉛筆の部分もマルクスのものではないように思われるのであるが、判断の材料がないので、表式展開のなかで明らかにエンゲルスによるものと見られる部分を除いて、いちいちそのことを記さなかった。
- なお、誤記の訂正などで、訳文と原文の双方に同じことを注記することもあるが、原則として、注の内容によって訳文か原文のどちらか一方に注記することにした。
- 2) ただし、表式展開のところでは、抹消された部分を見ることによって前後のつながりがはっきりするところもあるので、大きい抹消はなるべく注のなかで説明するようにした。
- 3) なお、マルクスは表式のなかでしばしば { } という記号で両部門の統括を行なっているが、これは原文ではそのまま残し、訳文ではエンゲルスがやっているように } に変えた。

[46] 先取り。II) 蓄積または拡大された [vergrößert] 規模での生産。
〔原文〕

[46] Anticipirt. II) Accumulation od. Production auf vergrößerter Stufenleiter.

1)¹⁾ 第1部では、蓄積が個々の資本家については次のように現われる〔sich darstellen〕こと、すなわち、彼の商品資本を貨幣化するさいに彼はこの商品資本のうち剰余価値を表示する(つまり剰余生産物によって担われている)部分をそれによって貨幣に転化させるが、それを彼はふたたび彼の生産資本の現物諸要素に再転化させるというように現われること、つまり、実際には現実の蓄積とは拡大された〔vergrössert〕規模での再生産であることを明らかにした。しかし個別資本の場合に現われる〔erscheinen〕ことは年間再生産でも現われざるをえないのであって、それはちょうど、われわれが単純再生産の考察で見たように、——個別資本の場合に——その固定成分が積立貨幣として《次々に》沈澱していくということが年間の社会的再生産でも現われる〔sich ausdrücken〕のと同様である。

1) この「1)」は、赤鉛筆で丸く囲まれている。

〔原文〕

1) Gezeigt in Buch I, wie sich d. Accumulation für d. einzelnen Capitalisten so darstellt, dass er bei Versilberung seines Waarenkapitals, den Theil desselben der Mehrwerth darstellt (also getragen wird von Mehrproduct), der so in Geld verwandelt, wieder rückverwandelt in Naturalelemente seines productiven Kapitals, wie also in fact d. wirkliche Accumulation = Reproduktion auf vergrösserter Stufenleiter. Was aber beim individuellen Kapital, muss auch erscheinen in d. jährlichen Reproduction, ganz wie wir gesehn bei Betrachtung d. einfachen Reproduktion, dass d. |:successive:| Niederschlag—beim individuellen Capital—seiner fixen Bestandtheile in Geld, das aufgeschätzt wird, sich auch in d. jährlichen gesellschaftlichen Reproduktion ausdrückt.

ある個別資本が500で、年間剰余価値が100(つまり商品生産物は $400 + 100 + 100$)だとすれば、600が貨幣に転化され、そのうちの400はふたたび前貸不変資本の現物形態に、100は労働力に転換され、そして——蓄積

の場合には（蓄積だけが行なわれるものとすれば）、それに加えて、 100^m が商品形態から貨幣形態に轉換された《のちに》¹⁾、さらに生産資本の現物諸要素への轉換によって追加不変資本に轉化させられる。そのさい次のことが前提されている。第1に、年間に 100^m が次々に貨幣として積み立てられるが、機能している不変資本の擴張のためであろうと、新たな産業的事業²⁾の創設のためであろうと、この額で十分である（技術的諸条件に対応している）ということである。しかしこの過程が行なわれようになるまでには、つまり現実の蓄積——拡大された規模での生産——が始められようになるまでには、もっとずっと長いあいだにわたる剰余価値の貨幣への轉化と貨幣での積立てとが必要だということもありうる。2) 拡大された規模での生産が事実上すでにあらかじめ始められているということが前提されている。というのは、貨幣（貨幣で積み立てられた剰余価値）を生産資本の諸要素に再轉化させるためには、これらの要素が商品として市場で買えるものとなっていることが前提されているからである。その場合、これらの要素が既製の商品として買われるのではなく注文であつらえられるものとしても、なんの違もない。これらの要素の代価が支払われるのは、これらの要素が現に存在するようになってからのことであり、またどのみちこれらにかんして現実の拡大された規模での再生産がすでに行なわれてからのこと、言いかえれば潜勢的に³⁾この再生産の諸要素が現に存在するようになってからのことである。というのは、《この場合には、》この再生産が現実に行なわれるためには、ただ、注文という起動力、すなわち商品の存在に先行する商品の購買とその先取りされた販売とが必要であるだけだからである。この場合には一方にある貨幣が他方での再生産を呼び起こすのであるが、それは、貨幣がなくてもこの再生産の可能性があるのである。というのは、貨幣それ自体は《現実の》再生産の要素ではないからである。

- 1) ここにはいくつかの語が行の上書き込まれているが、はっきりとは読み取れない。いちおう nachdem sie と読んでおくと、そうでないかもしれない。
- 2) 「産業的事業」には下線がないが引き忘れであろう。

- 3) 「潜勢的」——本稿では岡崎氏訳にしたがって potentiell を「潜勢的」, virtuell を「可能的」としている。しかし、この逆のほうがいいかもしれない。これらの語についてはエンゲルスが現行版の注6 [a]でふれている(K. II, S. 83)。

〔原文〕

Wenn ein individuelles Kapital=500, jährliche $\langle r \rangle$ Mehrwerth=100 (also Waarenproduct = $400 + 100 + 100$), so 600 in Geld verwandelt, 400 davon wieder umgesetzt in Naturalform des vorgeschossnen constanten Capitals, 100 in Arbeitskraft u.—im Fall d. Accumulation (gesetzt es werde nur accumulirt) ausserdem 100 |:nachdem sie:| aus Waarenform in Geldform umgesetzt, ausserdem verwandelt in zuschüssiges constantes Capital, durch Umsatz in Naturelemente d. productiven Capitals. Es ist dabei unterstellt: 1) dass während d. Jahrs 100 successive in Geld aufgeschätzt wird diese Summe genügend, (d. technischen Bedingungen entsprechend), sei es zur Ausdehnung des functionirenden constanten Capitals, sei es zur Anlegung in einem neuen individuellen Geschäft; es kann aber auch sein, dass d. Verwandlung v. Mehrwerth in Geld u. Aufschätzung in Geld viel länger nöthig, bevor dieser Process statthaben, also wirkliche Accumulation—Production auf erweiterter Stufenleiter—eintreten kann. 2) Es ist vorausgesetzt, dass in der That schon vorher Production auf erweiterter Stufenleiter eingetreten; denn um d. Geld (den in Geld aufgeschätzten Mehrwerth) in Elemente d. productiven Kapitals zurückzuverwandeln, ist unterstellt, dass diese Elemente als Waaren auf d. Markt kaufbar sind; es macht dabei auch keinen Unterschied, wenn sie nicht als fertige Waaren gekauft, sondern auf Ordre bestellt werden; bezahlt werden sie erst, nachdem sie da sind, u. jedenfalls mit Bezug auf sie wirkliche Reproduction auf erweiterter Stufenleiter bereits stattfand od. potentiell ihre Elemente da sind, da es |:dann:| nur d. Anstosses der Ordre, d. h. eines dem Dasein d. Waare vorausgehenden Kaufs derselben,

ihres anticipirten Verkaufs bedarf, damit sie wirklich stattfinden. Das Geld auf der einen Seite ruft dann d. Reproduction auf d. andren ins Leben, weil deren Möglichkeit ohne das Geld da, denn Geld an sich selbst ist kein Element der |:wirklichen:| Reproduction.

2)¹⁾ たとえば資本家Aが、1年が経過するあいだに（または技術的諸条件しだいではそれ以上の年数にわたって）次々に商品生産物の諸部分——その総計が彼の年間商品生産物をなす——を売っていく場合には、それにつれて彼は、商品生産物のうち剰余価値の担い手——剰余生産物——である部分をも、つまり彼が商品形態で生産した剰余価値そのものをも、次々に貨幣に転化させ、そうしてこの貨幣をだんだん積み立てて行き、こうして潜勢的な新貨幣資本が形成されていく。ここで潜勢的というのは、それが、生産資本の諸要素に転換されるべき使命〔Bestimmung〕をもっているからである。しかし実際には、彼はただ単純な蓄蔵貨幣形成²⁾を行なうだけであって、それは現実の再生産の要素ではない。そこで彼の仕事は一見したところ、《流通している》貨幣を次々に流通から引きあげて行くことだけであるが、この場合もちろん、こうして彼が嚴重にしまいこんでしまう流通貨幣がそれ自体なお——流通にはいる前に——ある蓄蔵貨幣の1部分であったことが排除されているわけではない。潜勢的な新たな貨幣資本であるこのようなAの蓄蔵貨幣が追加的な社会的富でないのは、かりにそれが消費手段に支出されるとした場合にそうでないのと同様である。それは通流から引きあげられた貨幣であるから、そのまえば通流のなかにあったのであって、以前にすでに蓄蔵貨幣の成分として貯えられていたことがあるかもしれないし、《貨幣化された》労賃だったり、《生産手段や》その他なんらかの商品を貨幣化したことがあったかもしれないし、諸々の不変資本部分や資本家の収入を流通させたかもしれない。それが新たな富でないことは、ちょうど貨幣である金が、単純な商品流通の立場から見て、それが1日に10回回転して10個の別々の商品を実現したからといって、それがいまもつ価値のほかにもその10倍の価値をもつということになら

ないのと同様である。諸商品は貨幣がなくても存在するのであり、また貨幣そのものは、1回転しようと10回転しようと、もとのままである(むしろ摩滅によってもっと小さくなっている)。ただ金生産においてのみ——金生産物が||47|剰余価値の担い手である剰余生産物を含んでいるかぎり——新たな富(潜勢的貨幣)がつくりだされるのであり、また、新たな金生産物がそっくり流通にはいるかぎりでのみ、それは潜勢的な新貨幣資本の《貨幣》材料を増加させるのである。

- 1) この「2)」は、赤鉛筆で丸く囲まれている。
- 2) Schatzbildung が貨幣資本の形成 (Bildung) にたいしてたんなる Schatz の形成として対置されている場合には、「貨幣蓄藏」とせず、とくに「蓄藏貨幣形成」と訳した。

〔原文〕

2) Wenn Capitalist A. z.B. während d. Verlaufs eines Jahres (od. je nach d. technischen Bedingungen, während grösserer Anzahl von Jahren) die successiven Portionen von Waarenproducten, deren Summe sein jährliches Waarenprodukt bildet, verkauft, so verwandelt er damit auch d. Theil d. Waarenprodukts, der Träger d. Mehrwerths—d. Mehrprodukt—, also den von ihm in Waarenform producirten Mehrwerth selbst, successive in Geld, speichert dies so nach u. nach auf u. bildet sich so potentielles neues Geldkapital; potentiell, wegen dessen Bestimmung u.¹⁾ in Elemente von produktivem Capital umgesetzt zu werden. Faktisch aber vollzieht er nur einfache Schatzbildung, die kein Element der wirklichen Reproduction ist. Seine Thätigkeit besteht dabei nur prima facie im successiven Entziehen von |circulirenden:| Geld aus der Circulation, wobei natürlich nicht ausgeschlossen ist, dass das circulirende Geld, das er so unter Schloss u. Riegel sperrt eben selbst noch—vor seinem Eintritt d. Circulation—Theil eines Schatzes war. Dieser Schatz der A., der potentiell neues Geldkapital ist, ist kein additioneller gesellschaftlicher Reichtum, so wenig es das ist, wenn

es in Consumtionsmitteln verausgabt würde. Als dem Umlauf entzognes Geld, war es also vorher in ihm vorhanden mag vorher schon |:einmal:| als Schatzbestandtheil gelagert haben oder |:vergoldeten:| Arbeitslohn, ober |:Produktionsmittel od.:| irgend andre Waare versilbert haben, d. constanten Kapitaltheile circulirt haben od. Revenue eines Kapitalisten. Es ist eben so wenig neuer Reichtum als Geld Gold²⁾, vom Standpunkt d. einfachen Waarencirc. aus betrachtet ausser seinem vorhandnen Werth dessen 10fachen Werth beträgt, weil es 10mal im Tag umgeschlagen, 10 verschiedene Waaren verwirklicht hat. D. Waaren sind ohne es da u. es selbst bleibt was es ist (rather wenig durch Verschleiss) in einem Umschlag od. in 10. Nur in d. Goldproduction—soweit d. Goldproduct Mehrproduct enthält, Träger || 47| von Mehrwerth, ist neuer Reichtum (das potentielle Geld) geschaffen u. nur soweit d. ganze Neue Goldproduct in Circulation tritt, vermehrt es d. |:Geld:| Material potentieller neuer Geldkapitale.

1) 「u.」—前後に抹消された語がある。消し忘れてであろう。

2) Geld も Gold もつぶれていてははっきり見えないが、このように読んでおく。

このような、貨幣形態で積み立てられた剰余価値はけっして追加的な新たな社会的富ではないにもかかわらず、それが新たな潜勢的貨幣資本を表わしているのは、その積立ての目的とされる機能のためである。〔新たな貨幣資本が剰余価値の漸次的な貨幣化によるのとは異なる仕方では生じることがありうることは、後に見るであろう。〕

〔原文〕

Obgleich kein zuschüssiger, neuer gesellschaftlicher Reichtum stellt dieser in Geldform aufgeschätzte Mehrwerth neues potentielles Geldkapital vor, wegen der Funktion, für die es aufgespeichert wird.〔Wir werden später sehn, dass neues Geldkapital auch auf andrem

Weg als durch allmähliche Vergoldung von Mehrwerth entspringen kann.)

貨幣は、商品を売ってもそのあとで買わないことによって、流通から引きあげられて蓄蔵貨幣として貯えられる。したがって、このような操作を一般的に行なわれるものと考える場合には、買い手がどこからやってくるというのかわからないように見える。というのは、この過程では——そしてどの個別資本も蓄積過程にあることができるのだからこの過程は一般的に行なわれるものだと考えなければならない——だれもが積み立てるために売ろうとするが、だれも買おうとしないからである。もしも年間再生産のさまざまな部分のあいだの流通過程を直線的に進行するものだと考えるとなれば——これがまちがいのなのである、というのはこの過程はどれもみな互いに反対の方向に進むもろもろの運動から成っているのであって、これには例外はほとんどないからである——、売らずに買金(または銀)生産者から始めなければならないことになり、また、次のようなことを前提しなければならぬことになる。すなわち、他のすべての人々が彼に売る、ということ。年間《社会的》剰余生産物の総計(剰余価値の担い手)が彼のところに移り、他の資本家の全部は、生まれながらに金¹⁾として存在する彼の剰余生産物を(したがってまた彼の剰余価値の自然的金化を)自分たちのあいだで《比例配分的に》分け合うのだ、ということ(というのは、金生産者の生産物のうち彼の機能資本を補填しなければならない部分は、すでに拘束されており処理されているからである)。彼の剰余生産物は他の資本家の全部が自分たちの年間剰余生産物を金化するための材料を引き出すファンデであるということ。したがって、ここでは金として生産されるこの剰余価値は、(価値の大きさから見れば)、まず蓄蔵貨幣という形態で蛹化しなければならない社会的な年間生産物の全体に等しいのだということ。これらのばかげた前提は、一般的な《同時的》貨幣蓄蔵を説明すること以外にはなんの役にも立たないのであって、これでは、生産その

ものは（金生産者の側以外では）一歩も前進しないであろう。

- 1) 現行版では「貨幣 (Geld)」となっているが、草稿では明らかに「金 (Gold)」となっている。

〔原文〕

Geld wird d. Circulation entzogen u. als Schatz aufgespeichert durch Verkauf d. Waare ohne nachfolgenden Kauf. Diese Operation also allgemein aufgefasst scheint nicht abzusehn wo der Käufer herkommen sollen, da in diesem Process—u. er muss allgemein aufgefasst werden, indem jedes individuelle Capital sich in Accumulationsprocedur befinden kann, — jeder verkaufen will, um aufzuschätzen, keiner kaufen. Stellte man sich den Circulationsprocess zwischen den verschiedenen Theilen d. jährlichen Reproduktion als in grader Linie verlaufend vor—was falsch, da er allzumal aus rückläufigen Bewegungen besteht, mit wenigen Ausnahmen—so müsste man mit dem Gold (resp. Silber)-producenten beginnen, der kauft, ohne zu verkaufen u. voraussetzen, dass alle andren an ihn verkaufen, dass d. Summe d. jährlichen |: gesellschaftlichen |: Mehrprodukts (der Träger d. Mehrwerths) an ihn übergeht u. sämmtliche andre Kapitalisten sein von Natur in Gold existirendes Mehrproduct (also auch Naturalvergoldung seines Mehrwerths) unter sich |: pro rata |: vertheilen, (denn der Theil d. Products des Goldproducenten, der sein functionirendes Kapital zu ersetzen hat, ist schon gebunden u. disposed of), dass es der Fonds ist, aus dem sie d. Materie für Vergoldung ihres jährlichen Mehrprodukts ziehn, dass also dieser hier in Gold producirtes¹⁾ Mehrwerth |: der Werthgrösse nach :|=d. ganzen gesellschaftl. jährl. Mehrwerth, der erst in Form von Schatz sich verpuppen muss. So abgeschmacket diese Voraussetzungen, so hülfen sie weiter nichts, als allgemeine |: gleichzeitige |: Schatzbildung zu erklären, womit d. Produktion

selbst um keinen Schritt weiter käme (ausser auf Seite d. Goldproduzenten).

- 1) producirte でなければならない、これは、次の語を Mehrproduct から Mehrwerth に、またそれに合わせて先行する dies を dieser に変えたのに、この producirtes をそれに合わせて修正するのを忘れたために生じたものである。

われわれは、この外観上の困難をさらに詳しく解決するまえに、まず部門Ⅰ(生産手段の生産)での蓄積と部門Ⅱ(消費手段の生産)での蓄積とを区別しなければならない。部類Ⅰから始めよう。

〔原文〕

Bevor wir näher diese scheinbare Schwierigkeit lösen ist zu unterscheiden: Accumulation in Klasse I (Production von Produktionsmitteln) u. Kl. II (Production v. Consumtionsmitteln^()). Wir beginnen mit Kategorie I.

3)¹⁾ 部門Ⅰを構成している多数の産業部門での諸投資も、それぞれの特殊の産業部門内部でのさまざまな個別的投資も、{それらの規模、技術的諸条件、等々、市場関係、等々をまったく度外視すれば} それぞれの年齢、すなわち機能期間に応じて、それぞれ、剰余価値が《次々に》潜勢的な貨幣資本に転化していく過程のさまざまな段階にあるということは明らかであって、この転化がそれらの資本の機能資本の拡大のためであろうと新たな産業的事業における貨幣資本の投下のためであろうと——「拡大された規模での生産」の2つの形態——、このことに変わりはない。そこから出てくるのは、それらのうちの1部分は適当な大きさに成長した《自分の》潜勢的な貨幣資本をたえず生産資本に転化させているが、すなわち積み立てられた、剰余価値の貨幣化によって積み立てられた貨幣で生産手段——不変資本の《追加的》諸要素——を買っているが、他方、他の1部分はまだ自分の潜勢的な貨幣資本の積立てをやっている、ということである。つまり資本家たちは、この2つの部類のどちらかに属して、一方は買い手と

して他方は売り手として——そして両方のそれぞれがどちらか一方だけの役割を担って——互いに相対しているのである。

1) この「3)」は、赤鉛筆で丸く囲まれている。

〔原文〕

3) Es ist klar, dass sowohl die Kapitalanlagen in d. zahlreichen Industriezweigen, woraus Kl. I besteht, wie die verschiedenen individuellen Kapitalanlagen innerhalb jedes besondern Industriezweigs je nach ihrem Lebensalter, i. e. Funktionsdauer [ganz abgesehen v. ihrem Umfang, technischen Bedingungen etc., Marktverhältnissen u. s. w.] sich auf verschiedenen Stufen d. Processes der |: successiven:| Verwandlung von Mehrwerth in potential moneycapital befinden, sei es zur Erweiterung ihres functionirenden Capitals, sei es zur Anlage d. Geldkapital in neuen industriellen Geschäften—den 2 Formen d. „Production auf erweiterter Stufenleiter“. Folgt daher: Ein Theil davon verwandelt daher beständig |: sein:| zur entsprechender Grösse angewachsenes potentiell Geldkapital in produktives Kapital, i. e. kauft mit d. angeschätzten, durch Vergoldung v. Mehrwerth angeschätzten Geld Productionsmittel — |: additionelle:| Elemente v. constanten Capital—während ein anderer Theil noch begriffen ist mit d. Aufschatz in seines potentiellen Geldkapitals¹⁾. Kapitalisten diesen beiden Categorien angehörig treten sich also gegenseitig die einen als Käufer, d. andren als Verkäufer—u. jeder d. beiden in dieser exklusiven Rolle—gegenüber.

1) はじめ Aufschätzung seines potentiellen Geldkapitals と書いたが、Aufschätzung を Aufschatz に変え、in を挿入した。そのさい、seinem potentiellen Geldkapital と訂正するのを忘れていた。

たとえば、Aは $600 (= 400^c + 100^v + 100^m)$ を B (これは2人以上の買い手を代表していてもかまわない) に売るとしよう。Aは600《の商品》を売

42 「蓄積と拡大再生産」(『資本論』第2部第21章)の草稿について(上)

って600の貨幣に替えたが、そのうち100は剰余価値を表わしており、彼はこれを流通から引きあげて貨幣として積み立てる。しかし、この100の貨幣は、ただ100の剰余価値の貨幣化、つまり100という価値の担い手であった剰余生産物の貨幣形態でしかない。この貨幣蓄蔵は生産ではまったくないのであり、したがってまたもともとけって生産の増加分ではない。資本家の行為は、この場合にはただ、100という剰余生産物を売ってせしめた貨幣を流通から引きあげてそれをしっかりと手もとに差し押えておくということだけである。この操作は、Aの側〔で行〕なわれるだけ《でなく》、流通表面〔Circulationsperipherie〕の多数の点で他の資本家A', A'', A''', 等々によっても行なわれるのであって、彼らはみな同様にせしめてこの種の貨幣蓄蔵に励むのである。貨幣が流通から引きあげられて多数の個別的な蓄蔵貨幣または潜勢的な貨幣資本として凝固する¹⁾ これらの多数の点については、それらは貨幣を不動化して、長短の期間にわたって貨幣の流通手段としての可動性を奪うので、〔それらは〕流通の障害であるように見える。だが、単純な商品流通の場合でも、それがまだ資本主義的商品生産にもとづいていなかったにもかかわらず、貨幣蓄蔵は行なわれているのだということをよく考えてみななければならない。社会のなかに現存する貨幣量は、そのうち現に流通のなかに $\parallel 51$ ²⁾ある部分よりもつねに大きい、——といってもこの貨幣量は事情に応じてふえたり減ったりするのはあるが。われわれはここで、同じ蓄蔵貨幣³⁾、同じ貨幣蓄蔵をふたたび見いだすのであるが、しかし今度は、資本主義的流通過程に内在的な1契機として見いだすのである。

- 1) 「凝固する(erstarrt)」の上に「積みあげる(aufhäuft)」と書いている。
- 2) 草稿の47ページの末尾には「(続きは51ページ)」とあり、51ページの冒頭には「47ページから続く」と書かれている。
- 3) 「同じ蓄蔵貨幣」という語は草稿51ページの右肩の部分にあたるが、この語の上に「(47ページを見よ。)」と書き加えられている。この指示は、前注の「47ページから続く」と同趣旨のものと思われるが、もしかするとこの「同じ蓄蔵貨幣」にのみかかわるものかもしれない。

〔原文〕

A verkaufe z. B. $600 (= \overset{c}{400} + \overset{v}{100} + \overset{m}{100})$ an B (der mehr als einen Käufer repräsentiren mag). Er hat für 600 |: Waaren:| verkauft, gegen 600 in Geld, wovon 100 Mehrwerth darstellen, die er der Circulation entzieht, sie aufschätzt als Geld; aber diese 100 Geld sind nur Vergoldung von 100 Mehrwerths, d. Geldform d. Mehrproducts, das der Träger eines Werths von 100. Diese Schatzbildung ist überhaupt keine Production, also von vornherein auch kein Increment der Production. D. Action des Kapitalisten besteht dabei nur darin, dass er das durch Verkauf d. Mehrproducts von 100 ergattete Geld der Circulation entzieht, festhält u. mit Beschlag belegt. Diese Operation findet |: nicht:| nur¹⁾ seitens d. A, sondern auf zahlreichen Punkten der Circulationsperipherie von andern A', A'', A''' etc. etc., Kapitalisten die alle ebenso emsig an dieser Sorte Schatzbildung arbeiten. Mit Bezug auf diese zahlreichen Punkte, wo Geld der Circulation entzogen u. in zahlreiche individuelle Schätze erstarrt²⁾, resp. potentiellen Geldkapitalen, scheinen Hindernisse d. Circulation, weil sie d. Geld immobilisiren u. es seiner mobility als Circulationsmittel für längre od. kürzere Zeit berauben. Aber zu erwägen, dass bei einfacher Waarencirculation, obgleich letztere noch nicht auf kapitalistischer Waarenproduction begründete Schatzbildung stattfindet; immer d. in Gesellschaft vorhandne Geldquantum grösser, als der in aktiver Circulation || 51 | befindliche Theil desselben, obgleich sie je nach Umständen aufschwellen od. abnehmen. Wir finden hier dieselben Schätze u. dieselbe Schatzbildung wieder, aber jetzt als ein d. kapitalistischen Circulationsprocess immanentes Moment.

1) ここにはインクのしみがあがる。オリジナルではインクのしみがあってもいったん書かれた文字はかなり鮮明に残っている。しかしここでは、なにも書かれていないように見える。現行版ではここに „statt auf“ がはいっているが、適切な挿入であろう。

44 「蓄積と拡大再生産」(『資本論』第2部第21章)の草稿について(上)

2) *erstarret* のうえに *aufhäuft* と書いてある。

信用制度の内部で、これらすべての潜勢的な資本が、銀行、等々の手に集積されることによって「貸付可能資本」、貨幣資本となり、しかももはや受動的な資本ではなく、また未来音楽としてではなくて、能動的かつ「*wuchern* する」資本(ここでは *Wuchern* は増殖するという意味である)になるとすれば、その満足のほどがしれるというものである。¹⁾

1) このパラグラフ全体の左側にインクで縦線が引かれている。

〔原文〕

Man greift, *welch Vergnügen*, wenn innerhalb d. Creditwesens, alle diese potentiellen Kapitalien durch ihre Concentration in Händen von banks etc. zu „*loanable capital*“, Geldkapital werden u. zwar nicht mehr *passivem* u. als Zukunftsmusik, sondern *aktivem* u. „*wucherndem*“ (hier *Wucher*¹⁾ im Sinn d. Wachsens).

1) 「*Wucher*」——「*Wuchern*」とあるべきところであろう。

しかし、Aがこの貨幣蓄蔵をなしとげるのは、ただ、彼が——彼の剰余生産物にかんしては——引き続いてただ売り手として現われる〔*aufreten*〕だけで《あとから》買い手としては現われない、というかぎりでのことである。したがって、彼が剰余生産物——貨幣化されるべき彼の剰余価値を担うもの——を次々に生産していくことが彼の貨幣蓄蔵の前提なのである。部門Iの内部だけでの流通を考察している当面の場合には、剰余生産物の現物形態は、それを1部分とする総生産物の現物形態と同様に、部門Iの不変資本の1要素という現物形態である、すなわち生産手段の生産手段という範疇に属する。それが買い手であるB、B'、等々の手のなかでどうなるか(どのような機能に役だつか)は、すぐに見るであろう。

〔原文〕

A. *vollbringt diese Schatzbildung* aber nur, sofern er—mit Bezug

auf sein Mehrproduct—successiv nur als Verkäufer, nicht |:hintennach:| als Käufer auftritt. Seine successive Production von Mehrproduct—dem Träger seines zu vergoldenden Mehrwerths—ist also d. Voraussetzung seiner Schatzbildung. Im gegebenen Fall, wo d. Circulation nur innerhalb Kl. I betrachtet wird, ist d. Naturalform d. Mehrproducts, wie die des Gesamtprodukts, von dem es Theil bildet, Naturalform eines Elements des constanten Kapitals Kl. I, d. h. gehört in d. Categorie der Produktionsmittel von Produktionsmitteln. Was daraus wird, (zu welcher Funktion es dient) in d. Hand d. Käufer B, B' etc. werden wir gleich sehn.

しかし、ここでまずしっかりつかんでおかなければならないのは次のことである。Aは貨幣——剰余価値にかかわる——を（積み立てるために）流通から引きあげるのに、他方で彼は、商品を流通に投げ入れておきながらそれに代わる別の商品を流通から引きあげないのであって、このことによつてB, B', 等々のほうでは、貨幣を流通に投げ入れてそのかわりにただ商品だけを《流通から》引きあげることができるようになるのである。当面の場合には、この商品はその現物形態（ならびにその用途〔Bestimmung〕）から見て、B, B' の不変資本の要素——固定要素であれ流動要素であれ——としてはいるものである。このあとのほうのことについては、剰余生産物の買い手であるB等々に掛り合うときに、もっと詳しく述べよう。

〔原文〕

Was aber hier zunächst festzuhalten, ist dies: Obgleich A Geld—quoad Mehrwerth—der Circulation entzieht (um es aufzuschätzen) werft er andrerseits Waare in sie hinein, ohne ihr andre Waare dafür zu entziehen, wodurch B, B' etc. ihrerseits befähigt, Geld hinein-

zuwerfen u. dafür nur Waare |: ihr :| zu entziehen. Im gegebenen Fall geht diese Waare ihrer Naturalform nach (wie ihrer Bestimmung) als Element, sei es fixes, sei es cirkulirendes, des constanten Capitals von B, B' ein. Ueber letztes mehr, sobald wir es mit dem Käufer d. Mehrproducts, dem B etc. zu schaffen.

ついでに、ここでふたたび、次のことを述べておこう。以前(単純再生産の考察《のところで》)と同様に、ここでふたたびわれわれは次のことを見いだす。年間生産物のさまざまな構成部分¹⁾の転換, すなわちそれらの流通〔これは同時に、資本の構成部分の回復——単純な規模でのまたは拡大された規模での、資本の再生産, しかもさまざまな規定性における資本(不変資本, 可変資本, 固定資本, 流動資本, 貨幣資本, 商品資本)の再生産——でなければならない〕は、われわれがI)〔単純再生産〕のところで、たとえば固定資本の再生産のところで見たのとまったく同様に, けっして、あとから行なわれる販売によって補われる単なる商品購買, またはあとから行なわれる購買によって補われる販売を前提していない。したがって、経済学, ことに重農学派やA. スミス以来の自由貿易学派が前提しているような、実際にはただ商品対商品の転換が行なわれるだけだということ前提してはいないのである。たとえば、単純再生産のところで見たように, たとえば不変資本 IIc の固定成分の《周期的》更新〔——(その総資本《価値》は $(v+m)$ (I) 《の諸要素》に転換される), それは、固定資本の最初の出現〔と更新〕との中間期間には, つまりその機能期間の全体にわたって、《まだ》更新されないで以前の形態のままで働き続けるが, 他方ではその価値がだんだん貨幣として沈澱していく²⁾——〕は、c IIのうち貨幣形態から現物形態に再転化する《固定》部分の単なる購買を前提するが、この購買にはm(I)の単なる販売が対応する。他方ではそれは、c IIの単なる販売, すなわちc IIのうち貨幣として沈澱する固定価値部分の販売を前提するが、この販売にはm(I)の単なる購買が対応す

る。この場合に転換が正常に行なわれるためには、単なる購買（c IIの側からの）が価値の大きさから見て単なる販売（c IIの側からの）に等しいということ、また同様に、m(I)からc IIのa)への単なる販売がc IIのb)からのm(I)の単なる購買に等しいということが前提される。同様にここでは、m(I)のうちの貨幣蓄蔵部分であるA, A'の単なる購買³⁾が、m Iのうちの、蓄蔵貨幣を追加生産資本の諸要素に転化させる部分であるB, B', 等々と均衡を保っている、ということが前提される。⁴⁾

- 1) 「構成部分」——Bestandteil は「構成部分」または「成分」と訳す。
- 2) この括弧書きの部分の原文は不完全文章であるが、その言わんとするところは明白である。
- 3) 「購買 [Kauf]」——明らかに「販売 [Verkauf]」の誤記である。
- 4) このパラグラフのはじめから、左側にインクで（ジグザグの）縦線が引かれており、それは草稿52ページの中ば（のちに注記する）まで続いている。

〔原文〕

Bemerken wir hier wieder nebenbei: Wir finden hier wieder, wie vorher, (|: sub :| Betrachtung der einfachen Reproduktion), dass d. Umsatz der verschiedenen Bestandtheile d. jährlichen Produkts, d. h. ihre Circulation [die zugleich Wiederherstellung d. Kapitalbestandtheile —Reproduction d. Capitals auf einfacher od. erweiterter Stufenleiter u. zwar d. Capitals in seinen verschiedenen Bestimmtheiten (Const, variable, fix, circulirend, Geldkapital, Waarenkapital) sein muss], ganz wie wir sub I) sahn z. B. bei Reproduction d. fixen Kapitals—keineswegs blossen Kauf von Waare voraussetzt, der sich durch nachfolgenden Verkauf od. Verkauf, der sich durch nachfolgenden Kauf ergänzt, so dass in fact nur Umsatz v. Waare gegen Waare stattfände, wie das d. Polit. Oekonomie namentlich d. freetrade economy seit Physiocraten u. A. Smith voraussetzt. Wir sahen z. B.¹⁾ bei d. einfachen Reproduction, dass d. |: periodische :| Erneuerung d. fixen Bestandtheils z. B. d. constanten Capitals IIc [—(welcher gesammte Kapital|: werth :|

sich umsetzt in $|(v+m)(I)|$, welches im Zwischenraum zwischen erster Erscheinung d. fixen Kapitals, während seiner ganzen Funktionszeit, wo es $|:$ noch $||$ nicht erneuert wird, sondern in d. alten Form fortwirkt, während sein Werth sich allmählig niederschlägt in Geld—) voraussetzt blossen Kauf des $|:$ fixen $||$ Theils von c.II, der sich aus Geldform in Naturalform rückverwandelt, der entspricht blosser Verkauf v. m.(I), andererseits blosser Verkauf v. c.II, des fixen Werththeils desselben, der sich in Geld niederschlägt, dem entspricht blosser Kauf v. m (I). Damit sich hier der Umsatz normal vollziehe, vorausgesetzt, dass blosser Kauf (seitens cII) d. Werthumfang nach=blosser Verkauf (seitens cII) u. ebenso dass d. blosse Verkauf von m (I) an cII a)=seinem blossen Kauf von cII b). Ebenso hier: dass der blosse Kauf²⁾ des schatzbildenden Theils A, A' in m (I) im Gleichgewicht mit dem Schatz in Elemente zusätzlichen productiven Kapitals verwandelnden Theils B, B'etc. in mI.

- 1) この z. B. はいったん消されたのち、点線でふたたび生かされている。
- 2) Verkauf の誤記である。

購買のあとに販売が、また販売のあとに購買が同じ価値額で続いて行なわれるということによって均衡がつくりだされるかぎりでは、購買のさいに貨幣を前貸しした側への、ふたたび買うまえにまず売ったほうの側への貨幣の還流が行なわれる。しかし、商品転換そのもの——年間生産物のさまざまな部分のそれ——にかんする現実の均衡は、互いに転換される諸商品の価値額が等しいということを経験とするのである。

〔原文〕

Soweit d. Gleichgewicht dadurch hergestellt, dass auf Kauf Verkauf u. vice versa zu gleichem Werthbetrag folgt, findet Rückfluss d. Geldes an d. Seiten statt, die es beim Kauf vorgeschossen, die zuerst verkauft haben, bevor sie wiederkauften. D. wirkliche Gleichgewicht mit

Bezug auf d. Waarenumsatz selbst—d. verschiedenen Theile d. jährlichen Produkts—aber bedingt durch gleichen Werthbetrag der gegeneinander umgesetzten Waaren.

しかし、単に一方的な諸変態、すなわち一方では大量の単なる購買、他方では大量の単なる販売が行なわれるかぎり——そしてすでに見たように資本主義的な基礎の上での年間生産物の正常な転換はこれらの一方的な変態を必然的にする——、均衡はただ、一方的な購買の価値額と一方的な販売の価値額とが一致することが前提されている場合にしか存在しない。商品生産が資本主義的生産の一般的形態だということは、貨幣が流通手段としてだけでなく貨幣資本として資本主義的生産において演じる役割を含んでいるのであり、またそのことは、単純な規模のであれ拡大された規模のであれ再生産の正常な転換の、正常な経過の、この生産様式に特有な一定の諸条件を生み出すのであるが、均衡は——この生産の形成は自然発生的であるので——それ自身1つの偶然だから、それらの条件はそっくりそのまま、不正常的経過の諸条件に、恐慌《の諸可能性》¹⁾に一転するのである。|

- 1) 「の諸可能性」——あとから書き加えられている。ただし、その数語まえに「諸可能性」と書いたのち消しており、はじめは「不正常的経過の、恐慌の、諸可能性、諸条件」となっていたと見られる。

〔原文〕

Soweit aber bloss einseitige Metamorphosen stattfinden, Masse blosser Käufe einerseits, Masse blosser Verkäufe andererseits—u. wir haben gesehen, dass d. normale Umsatz d. jährlichen Products auf kapitalistischer Grundlage diese einseitigen Metamorphosen bedingt—Gleichgewicht nur vorhanden, wenn vorausgesetzt, dass Werthbetrag d. einseitigen Käufe u. Werthbetrag der einseitigen Verkäufe sich decken. —Dass d. Waarenproduction die allgemeine Form d. kapitalistischen Production schliesst ein d. Rolle, die das Geld, nicht nur als Circu-

50 「蓄積と拡大再生産」(『資本論』第2部第21章)の草稿について(上)

lationsmittel, sondern als Geldkapital in derselben spielt u. erzeugt gewisse dieser Productionsweise eigenthümliche Bedingungen des normalen Umsatzes, d. normalen Verlaufs der Reproduction, sei es auf einfacher, sei es auf erweiterter Stufenleiter, die in eben so viele¹⁾ Bedingungen d. anormalen Verlaufs, |: Möglichkeiten von^{2):} | Krisen, umschlagen, da d. Gleichgewicht bei d. naturwüchsigen Gestaltung dieser Production—selbst ein Zufall ist. |

- 1) ここに Möglichkeiten と書いたのち、消している。
- 2) der を消してこの2語を挿入している。

|52| 同様にすでに見たことであるが、v(I)とc(II)のうちの対応する価値額との転換のさい、たしかにc(II)にとって最終的には、同じ価値額の商品(vI)による商品(II)の補填が行なわれるのであり、したがって資本家II)の側から見れば、この場合には自分の商品の販売があとから同じ価値額の商品Iの購買によって補われる。このような補填(第1部を参照せよ)がたしかに行なわれる。しかし、資本家IとIIとの相互の商品のこの転換では、この両者による交換が行なわれるのではない。c(II)はその商品をIの労働者階級に売り、後者は前者に一方的に商品の買い手として相対し、前者は後者に一方的に商品の売り手として相対する。II cはIの労働者階級から入手した貨幣を携えて、一方的に商品の買い手として資本家Iに相対し、この後者は前者にv(I)について一方的に商品の売り手として相対する。ただこの商品販売によってのみ、I)は最終的に自分の可変資本をふたたび貨幣形態で、貨幣資本の規定のもとに〔sub specie〕、再生産するのである。資本I)は、II)には(vI)について一方的に商品の売り手として相対するが、自分の労働者階級¹⁾には彼らの労働力を買うときに一方的に商品の買い手として相対する。また、労働者階級I)は、資本家II)には一方的に商品の買い手として相対するが、資本家I)には一方的に商品の売り手として、つまり自分の労働力の売り手として、相対する。

- 1) 「階級」に下線がないのは引き忘れであろう。

〔原文〕

[52] Wir haben eben so gesehn, dass bei d. Umsatz v(I) mit entsprechendem Werthbetrag c(II) zwar f. c(II) schliesslich Ersatz v. Waare(II) durch gleichen Werthbetrag v. Waare(vI) stattfindet, dass also seitens d. Capitalisten II) hier Verkauf d. eignen Waare nachträglich sich ergänzt durch Kauf von Waare I zum selben Werthbetrag. Dieser Ersatz (cf. Buch I) findet statt; es findet aber nicht statt Austausch seitens d. Kapitalisten I u. II in diesem Umsatz ihrer wechselseitigen Waaren. c(II) verkauft seine Ware an d. Arbeiterklasse von I, die tritt ihm einseitig als Waarenkäufer, es tritt ihnen einseitig als Waarenverkäufer gegenüber; mit dem von ihnen gelösten Geld tritt cII einseitig als Waarenkäufer den Kapitalisten I gegenüber, diese ihm pro v(I) einseitig als Waarenverkäufer. Durch diesen Waarenverkauf reproducirt I) schliesslich nur sein variables Kapital wieder in Geldform, sub specie des Geldkapitals. Tritt d. Kapital I) dem II) einseitig als Waarenverkäufer gegenüber (pro vI), so ihrer Arbeiterklasse einseitig als Waarenkäufer im Ankauf ihrer Arbeitskraft, u. tritt d. Arbeiterklasse I d. Capitalisten II einseitig als Waarenkäufer gegenüber, so d. Kapit. I einseitig als Waarenverkäufer, nämlich als Verkäufer ihrer Arbeitskraft.

労働者階級 I によって労働力がたえず販売されるということ,〔Iの〕可変資本部分が彼らの商品資本の1部分から貨幣資本へと回復されること,彼ら〔II〕の不変資本の1部分が彼らの商品資本の1部分から彼らの不変資本の自然形態へと補填されること,——これらは互いに条件となり合っているが,しかし非常に複雑な過程によって媒介されるのであって,この過程は実際には次の3つの互いにかみ合いながら互いに独立に進行する流通過程を含んでいるのである。

52 「蓄積と拡大再生産」(『資本論』第2部第21章)の草稿について(上)

- 1) 労働者(I)の側では、 $A-G^D (=W-G)$ 、資本家 I への彼らの労働力の販売。 $G-W$ (資本家 II の諸商品の購買。したがって、 $A-G(I) \dots G-W(II)$)。結果—— A (労働力) を維持し、それをふたたび商品として《労働》市場(I)で「売ることができる」。
 - 2) 資本家 II の側では、 $W-G$ (労働者 I への彼らの商品の販売) ... $G-W$ (資本家 I の諸商品 (vI) の購買)。結果——彼らの不変資本の 1 部分の、現物形態への回復。
 - 3) 資本家 I の側では、 $G-A$ (労働力 I の購買) —²⁾ $W-G$ (資本家 II への彼らの商品の 1 部分の、すなわち労働者 I によって新たに創造された (v+m) I のうちの v 部分の販売)。結果——彼らの可変資本価値の、商品資本(I)の価値部分から可変貨幣資本としての回復。
- 過程そのもののもつこの複雑さが、そっくりそのまま、不正常的な経過にきっかけを与えるものとなるのである。³⁾⁴⁾

- 1) 「 $A-G$ 」——既述のように、マルクスのこの草稿では、この種の定式における横線はすべて下方の並び線についている。たとえば、 $G-W \dots P \dots W'-G'$ ではなくて、 $G-W \dots P \dots W'-G'$ である。
- 2) この実線は点線 (...) であるべきところである。
- 3) 51ページの中ほどからここまで、左端に(ジグザグの)縦線が続いている。
- 4) このあとに、左端から中ほどまで、青鉛筆で横線が引かれている。

〔原文〕

D. fortwährende Verkauf d. Arbeitskraft seite<ns> d. Arbeiterklasse I, d. Wiederherstellung des variablen Kapitaltheils aus Theil ihres Waarenkapitals in Geldkapital, d. Ersatz eines Theils ihres Constanten Capitals aus Theil ihres Waarenkapitals in d. Naturalform ihres constanten Kapitals—bedingen sich wechselseitig, werden aber vermittelt durch einen sehr complicirten Process der in fact sich 3 in einander verschlingende u. unabhängig v. einander vorgehende Circulationspro-
cesse einschliesst.

- 1) Seitens d. Arbeiter (I). $A-G (=W-G)$, Verkauf ihrer Arbeits-

kraft an d. Kapital I: G—W (Kauf d. Waaren d. Capitalisten II). Also A—G(I)...G—W (II). Resultat: A (Arbeitskraft) erhalten, wieder als Waare auf |: Arbeits:| Markt (I).

2) Seitens der Kapitalisten II). W—G (Verkauf ihrer Waare an Arbeiter I)...G—W (Kauf d. Waaren (v), Kapitalisten I(<)). Resultat: Wiederherstellung eines Theils ihres constanten Kapitals in Naturalform.

3) Seitens d. Kapitalisten I). G—A (Kauf d. Arbeitskraft I)¹⁾ W—G (Verkauf eines Theils ihres²⁾ Waaren, des Theils v von den durch d. Arbeiter I neugeschaffnen (v+m) I an d. Kapitalisten II. Resultat: Wiederherstellung ihres variablen Kapitalwerths aus Werththeil d. Waarenkapitals (I) als variables Geldkapital.

D. Complicirtheit d. Processes selbst bietet ebenso viele Anlässe zu anormalen Verlauf.

- 1) この実線は点線 (...) であるべきところである。
- 2) ihres——次の語の Waarenkapitals を Waaren に修正したさいに ihrer と修正するのを忘れてる。

剰余生産物——剰余価値の担い手——は、その取得者である資本家 I にとってはなんの費用もかからない。彼らはそれを手に入れるためにどんな種類の貨幣も商品も前貸しする必要はない。彼らが前貸しする(すなわち買う)ものは「前貸 (avance) は、重農学派の場合にそうであるように、生産資本の諸要素に実現された価値の一般的形態である。労働者が支払いを受けるのは、どんな事情のもとでも、彼の労働力がすでに生産過程で働いたあと、つまりそれがすでに資本家のために商品に実現されたあとでしかない。生産期間の長さや生産物の性質に応じて、商品の販売(これは注文《での生産》の場合には労働過程が始まる以前にすでに行なわれていることがありうる)は、労働者たち〔の労働〕がすでに完成生産物か未完成生産物かに実現されてすでに支払われたのちに、長短さまざまの期間

にわたって行なわれるのであるが、このことは、このような「前貸」の範疇的規定をなにとつ変えるものではない¹⁾、彼らの不変資本と可変資本でしかないのである。労働者は彼らのために自分の労働によって彼らの不変資本を維持してやるだけではない。労働者は、彼らのために可変《資本》価値を、それに相当する新たに創造され商品の形態にある価値部分によって補填してやるだけではない。自分の剰余労働によって、労働者は彼らに、剰余生産物の形態で存在する剰余価値を引き渡すのである。この剰余生産物を次々に売っていくことによって、資本家たちは蓄蔵貨幣、《追加的な》潜勢的貨幣資本を形成する。いまここで考察している場合には、この剰余価値ははじめから生産手段の生産手段というかたちで存在している。この剰余生産物は、B, B', B'', 《等々》(I)の手のなかではじめて追加不変資本として機能する。しかしそれは、可能的には、それが売られる以前から、貨幣蓄蔵者 A, A', A'' 等々(I)の手のなかで追加不変資本である。これは、Iの側での《再》生産の価値の大きさだけを見るならば、単純再生産の限界の内部でのことである。というのは、この可能的な追加不変資本(剰余生産物)を創造するのに追加資本が動かされたわけでもなく、また単純再生産の基礎の上で支出されたのよりも大きい剰余労働が支出されたわけでもないからである。²⁾ 53| 違う点は、ここではただ、充用される剰余労働の形態だけであり、その特殊な役立ち方の具体的な性質だけである。この剰余労働は、IIのために機能すべき、またそこでc II)となるべき生産手段の生産にではなくて、生産手段(I)の生産手段に支出されたのである。〔単純再生産の場合には、剰余価値Iの全部が収入として支出され、したがって商品IIに支出されるということが前提された。したがって剰余価値Iはこの場合には、c II)をその現物形態でふたたび補填すべき生産手段だけから成っている。³⁾ ところで、Iのある種の生産諸部門の生産物は、生産手段としてIIにはいるのではなく、Iそれ自身のなかでのみふたたび生産手段として役立つことができるものである。これらの部門の生産物は、価値から見れば他のあらゆる部門の生産物と同様に $c+v+m$ に分解されることができる。では、追加不変資本Iのために

素材を提供することのない単純再生産を前提した場合に、このmはどういうことになるのだろうか？ これはIのもとで、単純再生産のところで考察すべきことである。〔 〕

- 1) この〔 〕(原文では角括弧)のなかに書かれている部分の左側にはインクによる縦線があり、さらにその左側に赤鉛筆による縦線がある。
- 2) ここで草稿の52ページが終わるが、ちょうど右端まで書かれており、次ページの冒頭が改行となるかどうかは形式的には判断できない。エンゲルスは改行していないので、それに従う。
- 3) この一文の左側には縦線が引かれている。その末尾に区切りのしるしをつけたあと、さらにこのパラグラフの末尾まで縦線が引かれている。

〔原文〕

D. Mehrproduct—d. Träger d. Mehrwerths—kostet d. Aneignern desselben, d. Capitalisten I, Nichts. Sie haben in keiner Art Geld od. Waare vorzuschiesse, um es zu erhalten. Was sie vorschiesse (i.e. kaufen) [Vorschuss (avance) wie bei d. Physiokraten die allgemeine Form von Werth verwirklicht in Elementen von Productivem Kapital. D. Arbeiter wird unter allen Umständen nur bezahlt, nachdem sein Arbeitskraft bereits in Productionsprocess gewirkt hat, nachdem sie sich also bereits verwirklicht hat in Waaren für d. Capitalisten. Dass je nach d. Dauer der Productionsperiode u. d. Natur d. Products der Verkauf der Waare (er kann bei |: Production auf |: Ordres schon stattgefunden haben bevor d. Arbeitsprocess beginnt) kürzer od. länger nach bereits in fertigen od unfertigen Product verwirklichter u. bereits bezahlter Arbeiter stattfindet, ändert an dieser kategorischen Bestimmung des „Vorschusses“ nichts) ist nichts als ihr constantes u. variables Kapital. Der Arbeiter erhält ihnen nicht nur durch seine Arbeit ihr constantes Kapital, er ersetzt ihnen nicht nur durch¹⁾ d. variablen |: Kapital :| Werth durch einen entsprechenden neugeschaffnen Werththeil in Form v. Waare; durch seine Mehrarbeit liefert er ihnen ein (en)²⁾ in Form v. Mehrproduct exi-

stirenden Mehrwerth. Durch den successiven Verkauf desselben bilden sie d. Schatz, |; additionell;| potentielles Geldkapital. Im hier betrachteten Fall existirt dieser Mehrwerth von vornherein in Productionsmitteln v. Productionsmitteln. Erst in der Hand von B, B', B'' |; etc. |; (I) functionirt dieses Mehrprodukt als additionelles constantes Kapital, aber es ist dies virtualiter, bevor es verkauft ist, in der Hand der Schatzbildner A, A', A'' etc. (I). Es ist dies, wenn wir bloss d. Werthumfang der |; Re :| Produktion seitens I betrachten, innerhalb d. Grenzen der einfachen Reproduktion, denn kein zusätzliches Kapital ist in Bewegung gesetzt worden um dies virtualiter additionelle constante Kapital (d. Mehrproduct) zu schaffen, auch keine grössere Mehrarbeit, als die auf Grundlage der einfachen Reproduktion verausgabte || 53 | Der Unterschied liegt hier nur in der Form der angewandten Mehrarbeit, der konkreten Natur ihrer besondern nützlichen Weise. Sie ist verausgabt worden in Productionsmitteln v. Productionsmitteln (I), statt in Produktion v. Productionsmitteln, die funktioniren sollen für II u. dort cII) bilden. (Bei d. einfachen Reproduktion wurde vorausgesetzt, dass d. ganze Mehrwerth I verausgabt wird als Revenue, also in Waaren II; er besteht hier also hier nur aus Productionsmitteln, die cII) in seiner Naturalform wieder zu ersetzen haben. Nun gehn d. Producte gewisser Productionszweige v. I nicht als Productionsmittel in II ein, sondern können nur wieder dienen als Produktionsmittel in I selbst. Das Product dieser Zweige dem Werth nach, wie das jedes andern Zweiges zerfällbar in c+v+m. Was wird also aus diesem m bei Voraussetzung d. einfachen Reproduktion, die nicht d. Stoff liefert für additionelles constantes Capital I? Dies zu betrachten sub I bei d. einfachen Reproduktion.<)>

1) この durch は消し忘れであろう。赤鉛筆で消されている。

2) この ein は einliefern の前綴と読むこともできるかもしれないが、エンゲル

すが訂正しているように einen の誤記なのであろう。

したがって、単純再生産——《たんに》価値の大きさ《だけ》から見れば——の内部で、拡大された規模での再生産の、現実の資本蓄積の、物質的土台〔Substrat〕が生産されるということになる。それはまさにとりもなおさず（当面の場合には）、《直接に》生産手段の生産に支出された剰余労働 I、すなわち可能的剰余不変資本の創造に支出された、労働者階級（I）の剰余労働である。だから、I の A, A', A'', 等々の側での可能的な新追加貨幣資本の形成——資本家が《まったく》貨幣を支出することなしに形成された彼らの剰余生産物を次々に売っていくことによつての——は、生産手段（I）の追加的生産の単なる貨幣形態なのである。

〔原文〕

Es folgt also, dass innerhalb d. einfachen Reproduktion—|: bloss :| dem Werthumfang nach betrachtet—d. materielle Substrat der Reproduktion auf erweiterter Stufenleiter, d. wirklichen Kapitalaccumulation, producirt wird. Es ist ganz¹⁾ einfach (im vorliegenden casus) |: direkt :| in Production v. Produktionsmitteln verausgabte Mehrarbeit I, in Schöpfung v. virtuellen surplus constanten Kapital I verausgabte Mehrarbeit d. Arbeiterklasse (I). Die Bildung v. virtuellen neuen zusätzlichen Geldkapital seitens A, A', A'' etc. I—durch successiven Verkauf ihres Mehrprodukts, das ohne |: alle :| kapitalistische Geldausgabe gebildet—ist also d. blosse Geldform additioneller Production v. Produktionsmitteln (I).

1) ganz——この語は抹消されているが、点線による下線でふたたび生かされているようである。

したがって、可能的追加貨幣資本の生産は、ここでは〔追加貨幣資本は、あとで見るように、まったく別の仕方でも形成されうる〕¹⁾、生産過程そのものの1現象、すなわち生産資本の一定の形態の、あるいは実体的に言えば〔realiter〕その諸要素の一定の形態の生産という現象のほかには

なにも表現していない。

1) この { } のなかの部分の左側にはインクで縦線が引かれている。

〔原文〕

Production v. virtuell additionellen Geldkapital drückt also hier
[additionelles Geldkapital kann wie wir später sehen werden, sich
auch ganz anders bilden] nichts aus als ein Phänomen d. Produktions-
processes selbst, Production einer bestimmten Form v. Productivem
Capital od. realiter dessen Elementen.

したがって、《可能的》追加貨幣資本の大規模な生産——流通表面
[Circulationsperipherie]の多数の点での——は、可能的追加生産資本の多
方面での生産の結果かつ表現にほかならないのであって、この可能的追加
生産資本の成立そのものは産業資本家の側からの「追加」貨幣支出を少し
も前提していない。

〔原文〕

Production auf grosser Stufenleiter von |: virtuell :| additionellem
Geldkapital—auf zahlreichen Punkten der Circulationsperipherie—ist
also nichts als Resultat u. Ausdruck vielseitiger Production von vir-
tuell zusätzlichem productivem Kapital, dessen Entstehung selbst
keine „zusätzlichen“ Geldausgaben seitens d. industriellen Kapitalisten
voraussetzt.

この可能的追加生産資本がIのA, A', A'', 等々の側で次々に可能的
貨幣資本(蓄蔵貨幣)に転化していくということは、彼らの剰余生産物が
次々に売れていくこと、つまり購買によって補足されない一方的な商品の
販売が次々に行なわれることを条件とするのであって、このような転化
は、流通から次々と貨幣が引きあげられそれに応じて蓄蔵貨幣が形成され
ることによって行なわれるのである。この貨幣は——金生産者が買い手
ある場合は別として——けって貴金属の富の追加を前提しておらず、た

だ、通流のなかにある貨幣の機能の変化を前提するだけである。それは、さっきまでは流通手段として機能していたが、いまでは蓄蔵貨幣として、可能的には形成されつつある新貨幣資本として、機能する。だから、追加貨幣資本の形成と一国にある貴金属の量とはけって互いに因果関係にあるものではないのである。

〔原文〕

Die successive Verwandlung dieses virtuell zusätzlichen productiven Kapitals in virtuelles Geldkapital (Schatz) seitens A, A', A" etc. I, die durch den successiven Verkauf ihres Mehrprodukts bedingt ist, also durch successiven einseitigen Waarenverkauf ohne ergänzenden Kauf, vollzieht sich in successiver Entziehung von Geld aus der Circulation u. ihr entsprechend Schatzbildung. Das Geld—except d. Fall, wo d. Goldproducent der Käufer—unterstellt in keiner Weise zusätzliche <n> edlen Metallreichtum, sondern nur veränderte Funktion von in Umlauf befindlichem Geld. Eben functionirte es als Circulationsmittel, jetzt funktionirt es als Schatz, virtuell sich bildendem neuem¹⁾ Geldkapital. Bildung v. zusätzlichem Geldkapital u. Masse des in einem Land befindlichen edlen Metalle stehn also in keiner ursächlichen Verbindung mit einander.

1) bildendem neuem—bildendes neues とあるべきところである。

そこから、さらに次のことが出てくる。すなわち、一国内で¹⁾——ここでは I) のもとで——機能している生産資本（それに合体された労働力を含めて、というのは、それは剰余生産物の創り手、剰余労働の創り手であるから）がすでに大きければ大きいほど、また労働の生産力が発展しており、したがってまた生産手段の生産の急速な拡張のための技術的な手段が発達していればいるほど——それゆえ剰余生産物の量も（価値《から見て》もこの価値を表わす使用価値の量《から見て》も）大きければ大きいほど——、それだけまた、1) 可能的追加生産資本(A, A', A", 等々 I)の手の

なかで剰余生産物の形態にある)も大きいのであり、また、2) 貨幣に転化した剰余生産物つまり可能的追加貨幣資本 (A, A', A'' (I)の手のなかにある〔 〕)の量もそれだけ大きい、ということである。〔だからたとえばフラートンが、普通の意味での過剰生産についてはなにも知ろうとしないのに、資本の、つまりは貨幣資本の過剰生産については知ろうとしているのは、これもまた、最良のブルジョア経済学者たちでさえも彼らの制度の機構をまったくわずかしか理解していないことを証明しているのである。〕²⁾

1) 「一国内で」の「国」の下には下線がないが、引き忘れであろう。

2) この〔 〕のなかに書かれている部分の左側にはインクで縦線が引かれている。

〔原文〕

Es folgt daher ferner: Je grösser bereits das in einem Land—hier sub I)—funktionirende productive Capital (eingerechnet die ihm incorporirte Arbeitskraft, da¹⁾ der Zeugner d. Mehrproducts d. Mehrarbeit), je entwickelter d. Productivkraft d. Arbeit u. damit auch d. technischen Mittel rascher Ausweitung der Production v. Productionsmitteln—je grösser daher auch d. Masse d. Mehrproducts (|: nach :| Werth u. d. Masse d. Gebrauchswerthe worin er sich darstellt)—desto grösser 1) d. virtuell zusätzliche productive Kapital (in d. Form v. Mehrprodukt in d. Hand v. A, A', A'' etc. I) u. 2) d. Masse dieses in Geld verwandelten Mehrproducts, also d. virtuell additionelles Geldkapitals (in Händen v. A, A', A'' (I) < >). (Wenn also Fullarton z. B. nichts v. d. Ueberproduction im gewöhnlichen Sinn wissen will, wohl aber von Ueberproduction v. Kapital, näm. Geldkapital, so beweist dies wieder, wie absolut wenig selbst d. besten bürgerlichen Oekonomen vom Mechanismus ihres Systems verstehen.)

1) da—den のようにも見えるが、それでは意味が取りにくいので、da と読んでおく。

注意せよ。——資本家 I によって直接に生産され取得される剰余生産物は、§ 54 現実の資本蓄積の、すなわち拡大された規模での再生産の実体的な基礎〔die reale Basis〕である——それは実際には B, B', B'', 等々の手のなかではじめて《かかるものとして》機能する——が、他方では逆に、それは、貨幣という蛹になっている状態では——蓄蔵貨幣としては、そしてたんに、次々と形成されていく可能的貨幣資本としては——絶対的に不生産的なものであって、この形態で生産過程に並行はするが、しかし生産過程の外部に横たわっている。それは資本主義的生産の自重 (dead weight) である。〔可能的貨幣資本として積み立てられているこの剰余価値を利潤のためにも「収入」のためにも使用できるものにしようという病的欲求は、信用制度と「有価証券」とにその努力の目標を見いだす。これらのものによって貨幣資本は、別の形態で、資本主義的生産体制の経過と発展とに、まことに巨大な影響を与えることになるのである。〔 〕¹⁾

1) この { } のなかに書かれている部分の左側にはインクで縦線が引かれている。

〔原文〕

Notabene: Wenn d. Mehrproduct, direct producirt u. aneignet durch d. Capitalisten I, die reale Basis § 54 | der wirklichen Kapitalaccumulation, d.h. d. Reproduction auf erweiterter Stufenleiter ist,—functionirt das actuell erst |: als solches: | in d. Händen v. B, B', B'' etc. (I)—, so ist es dagegen in seiner Geldverpuppung—als Schatz u. bloss sich successive bildendes virtuelles Geldkapital—absolut unproductiv, läuft d. Productionsprocess in dieser Form parallel, liegt aber ausserhalb desselben. Es ist ein Bleigewicht (dead weight) der kapitalistischen Production. [Die Sucht, diesen als virtuelles Geldkapital sich aufschätzenden Mehrwerth sowohl zum Profit als zur „Revenue“ brauchbar zu machen findet in Creditssystem u. die¹⁾ „Papieren“ das Ziel seines Strebens. Das Geldkapital erhält dadurch in einer andern Form d. enormsten Einfluss auf d. Verlauf u. d. Entwicklung d.

kapitalist. Productionssystem. < >

1) die — den とあるべきところである。

一方では、すでに機能している資本の大きさは {それゆえこの大きさに対応する、可能的貨幣資本に転換された剰余生産物の相対的な大きさは} 次のことを前提する。すなわち、すでに機能している資本の規模の拡大は、同時にまた、可能的貨幣資本の規模の現実の拡大を要求するということ、したがって、絶対的に《はるかに》より大きな量の可能的貨幣資本が貨幣の蛹という《転化された》状態にはいりこんだままであるということである。

[原文]

Einerseits setzt d. Grösse d. bereits funktionirenden Kapitals (hence d. entsprechende relative Grösse d. in virtuelles Geldkapital umgesetzten Mehrprodukts) voraus, dass d. Erweiterung seiner Stufenleiter aber auch real erweiterten Umfang v. virtuellen Geldkapital erheischt, also absolut |:viel:| grössere Massen v. virtuellen Geldkapital im |:vergewandelten:| Zustand d. Geldverpuppung verharren.

他方では、年間に再生産される可能的貨幣資本《の大きさ》が絶対的に増大する場合には、同時にまたその分割もそれだけ容易になる。すなわち、同じ資本家《の手によって》(追加の新事業に投下される)にせよ、別のいくつかの手(家族成員、等々)によってにせよ、それだけ速く新たな資本として投下されるのである。ここで貨幣資本の分割というのは、まったく切り離されて新たな《(貨幣)》資本として新たな《独立した》事業で投下されることを意味している。¹⁾

1) ページの右端までいっぱい書かれている。したがって次行が改行となるのかどうかは判断がむずかしいが、次行の頭がこの行よりもちょっと左に出ているので、エンゲルス版と同じく改行とみておく。なお、エンゲルスの原稿では、はじめ改行しないで書いたものにあとから改行の指示を加えている。

〔原文〕

Andrerseits. Bei d. absoluten Vergrößerung d. | : Umfangs : | jährlichen reproducirten virtuellen Geldkapitals, ist aber auch dessen Segmentation leichter, i. e. dass es rascher als neues Kapital sei es | : in Hand : | desselben Kapitalisten (in zusätzlichem neuem Geschäft angelegt) angelegt wird, sei es in andren Händen (Familiengliedern etc.). Segmentation v. Geldkapital meint hier, dass ganz losgetrennt wird, | : um : | als neues | : (Geld) : | Capital in neuem | : selbständigem : | Geschäft angelegt zu werden.

剰余生産物の売り手である A, A', A'', 等々(I)に《とって》は、この剰余生産物は生産過程の直接の結果であって、この生産過程は単純再生産の場合にも必要な、不変資本と可変資本との前貸のほかにはなにも流通行為を前提しないのであり、さらに彼らは、拡大された規模での再生産の実体的基礎〔die reale Basis〕を供給し、事実上、可能的追加不変資本をつくりだすのであるが、これにたいして B, B', B'' (I)は違った事情にある。1) 彼らの手によってはじめて、A, A', A'', 等々(I)の剰余生産物は実際に追加不変資本〔というのは、さしあたり、生産資本の他方の要素である追加労働力、したがって追加可変資本のほうはまだ考慮の外にしているからである〕¹⁾として機能する。2) だが、この剰余生産物が彼らの手にはいつてくるためには、流通行為が必要なのであって、彼らはこの剰余生産物を買わなければならない。

1) この〔 〕のなかに書かれている部分の左側にはインクで縦線が引かれている。

〔原文〕

Wenn | : für : | d. Verkäufer d. Mehrprodukts A, A', A'' etc. (I) selbes directes Ergebniss des Productionsprocesses ist, der ausser dem auch bei einfacher Reproduction erheischten Vorschuss in constantem u. variabl. Kapital, keine weitere<n> Circulationsakte voraussetzt, wenn

sie ferner d. reale Basis der Reproduction auf erweiterter Stufenleiter liefern, in d. That virtuell zusätzliches constantes Kapital fabriciren, so dagegen die B, B', B'' (I) verhalten sich differently: 1) erst in ihrer Hand wird das Mehrprodukt der A, A', A'' etc. (I) actuell funktioniren als zusätzliches constantes Kapital [da aber einstweilen noch ausser Acht lassen d. andre Element d. productiven Kapitals, d. zusätzliche Arbeitskraft, hence d. zusätzliche variable Kapital]; 2) aber, damit es in ihre Hände komme, ist ein Circulationsakt erfordert, sie haben d. Mehrprodukt zu kaufen.

1) についてここで言うておかなければならないのは、A, 等々(I)によって生産される剰余生産物(可能的追加不変資本〔〕)の一大部分は、今年生産されても来年(またはもっとあとで)はじめて実際にB, 等々(I)の手で産業資本として機能することができる, ということである。2) については、この流通過程のために必要な貨幣はどこからやってくるのか? が問題になる。

〔原文〕

Ad 1) ist hierauf zu besprechen—worauf später einzugehn—dass ein grosser Theil des Mehrproducts (virtuellen zusätzlichen constanten Kapitals<) > producirt durch A etc. (I) in diesem Jahr producirt, erst im nächsten Jahr (od. noch später) actuell in d. Händen von B etc. (I) als industrielles Kapital funktioniren kann;¹⁾ ad 2) fragt sich, wo kommt das zu d. Circulationsprocess nöthige Geld her?

1) 原文ではここで改行されているが、しかしこの文の末尾はセミコロンのであり、また次行の最初の字母が小文字になっているので、改行されていないものとみなしておく。

B, B', B'', 等々(I)の生産する諸商品(生産物)がそれ自身ふたたび現物のままで彼らの生産過程にはいるかぎりでは、その分だけ彼ら自身の

剰余生産物の1部分が直接に(流過程による媒介なしに)彼らの生産資本に移され、またここでは不変資本の追加要素としてはいることは自明である。しかしまた、そのかぎりでは、彼らはA, A', 等々(I)の剰余生産物を貨幣化する立場にはないわけである。

〔原文〕

Soweit d. Waaren (Producte) die B, B', B'' etc. (I) produciren, selbst wieder in natura in ihren Productionsprocess eingehn, versteht es sich v. selbst, dass pro tanto ein Theil ihres eigenen Mehrproducts direct (ohne Vermittlung durch Circulationsprocess) übertragen wird in ihr productives Kapital u. hier als additionelles Element d. constanten Capitals eingeht. Pro tanto sind sie aber auch keine Vergolder d. Mehrproducts von A, A', etc. (I).

それはさておき、あの貨幣はどこからやってくるのか？ 知ってのとおり、彼らは各自の剰余生産物を売ることによって、A, A', 等々と同様に自分の蓄蔵貨幣を形成してきたのだが、いまや彼らは目標点に、つまり蓄蔵貨幣として積み立てられた《たんに》可能的な追加貨幣資本がいよいよ実際に追加貨幣資本として機能するという目標点に達したのだ。しかし、これでは、ただぐるぐる回りをしているだけである。いま、Aたち(I)が貨幣を流通から引きあげ、そのかわりに諸商品を流通に投げ入れる。Bたち(I)がそれを引き継いで、今度は彼らが、貨幣を流通に投げ入れて、彼らの商品を引きあげる。これではわれわれは、ただ、Bたち(I)が以前に引きあげた貨幣がどこからやってくるのか、という問題にたち至るだけである。

〔原文〕

Hiervon abgesehn, wo kommt d. Geld her? Wir wissen, dass sie ihren Schatz wie A, A' etc. gebildet, durch Verkauf ihrer respectiven Mehrproducte, aber nun ans Ziel gelangt sind, wo ihr virtuelle¹⁾ als

Schatz aufgehäuftes | : nur : | virtuelles zusätzliches Geldkapital nun effective als zusätzliches Geldkapital funktionirt. Aber damit drehen wir uns nur im Zirkel. Die A's (I) entziehn jetzt Geld d. Circulation u. werfen dafür Waaren in sie hinein. Die B's (I) thaten das weiter, u. werfen jetzt Geld in sie hinein, um ihr Waare zu entziehn. Damit kommen wir nur auf d. Frage, wo d. Geld herkommen, das d. B's(I) früher entzogen ?

1) この virtuelle は消し忘れであろう。鉛筆で抹消されている。

けれども、われわれがすでに単純再生産の考察から知っているように、IとIIとの資本家たちの剰余価値 (ないし剰余生産物)を転換するためには、彼らの手中に、ある量の貨幣がなければならない。以前の場合には、収入への支出、消費手段への支出に役だっただけの貨幣が、資本家たちが各自の商品の転換のために前貸しした度合いに応じて、彼らのもとに帰ってきた。今度も同じ貨幣がふたたび現われるのであるが、しかし今度はその機能が違っている。AたちとBたちとは(I)、剰余生産物を追加的な可能的貨幣資本に転化するための貨幣をかわるがわる供給しあうのであり、また、新たに形成された貨幣資本を購買手段としてかわるがわる流通に投げ返すのである。

〔原文〕

Wir wissen jedoch schon aus d. Betrachtung d. einfachen Reproduction, dass sich eine gewisse Geldmasse in Händen d. Kapitalisten I u. II befinden muss, um ihren Mehrwerth (resp. Mehrproduct) umzusetzen. Dort kehrte das Geld, das nur zu spending in revenue, Verausgabung in Consumtionsmittel diente, zu d. Kapitalisten zurück im Maass wie sie es vorgeschossen zum Umsatz ihrer respectiven Waaren; hier erscheint dasselbe Geld wieder, aber mit veränderter Funktion. Die A's u. d. B's (I) liefern sich abwechselnd d. Geld zur

Verwandlung v. Mehrproduct in zusätzliches virtuelles Geldkapital u. werfen abwechselnd d. neugebildete Geldkapital als Kaufmittel in d. Circulation zurück.

ここで前提されているただ1つのことは、国内に存在する貨幣量だけで（流通速度、等々は前提されている）貨幣蓄蔵のためにも実際の流通のためにも十分だということである、——これは、||55|すで見たとような、単純な商品流通の場合にも充たされていなければならない前提と同じものである。ここで違っているのは蓄蔵貨幣の機能だけである。ただし、現存貨幣量が以前よりも大きくなければならない。なぜならば、1) 資本主義的生産ではすべての生産物が {広汎な¹⁾ 例外はあるが} 商品として生産され、したがって貨幣への蛹化を経なければならぬからである。2) 資本主義的生産の基礎の上では、商品資本の量もその²⁾ 価値の大きさも、絶対的により大きいだけではなくて、はるかに大きな速度で増大するからである。3) ますます膨張する可変資本がたえず貨幣資本に転換されなければならないからである。4) 生産の拡大に歩調を合わせて新たな貨幣資本の形成が進行するので、これらの資本の蓄蔵貨幣形態のための材料も存在しなければならないからである。このことは、信用制度でさえも金属を主とする流通を伴っているような、資本主義的生産の第1段階にはそっくりそのままあてはまるのであるが、それは信用制度の最も発達した段階にさえ、ここでも信用制度の基礎は相変らず金属流通であるので、そのかぎりであてはまるのである。このあとのほうの場合には、一方では追加的金生産（貴金属の生産）が、それが交互に豊かになったり乏しくなったりするかぎり、かなり長い期間についてばかりでなく非常に短い期間のうちにも諸商品の価格に攪乱的な影響を及ぼすことがありうる。他方では全信用機構が、あらゆる種類の操作や方法や技術的設備によって、現実の金属流通を（相対的に）たえず増大していく³⁾ 最少限度に制限することにたえず努めている。——それと同時に、全機構の精巧さも、またそれがいっそう大

きな危険にさらされることも、ともに手を携えて進んでいくのである。

- 1) 「広汎な」——原語は *erweitert* としか読めないの、こゝ訳しておく。
- 2) 「その」——原語は明らかに *derselben* であり、このままでは「その」は「商品資本の量の」ということになるが、ここはおそらく *desselben* とあるべきところ、つまり「その」は「商品資本の」の意味なのであろう。
- 3) 「増大していく」——原語は *wachsend* としか読めないように思われる。エンゲルス版では、*abnehmend* (減少していく) となっている。

〔原文〕

Das Einzige, was hierbei vorausgesetzt ist, ist dass d. im Land befindliche Geldmasse (Umlaufgeschwindigkeit etc. vorausgesetzt) hinreicht sowohl für Schatzbildung als aktive Circulation—selbe Voraussetzung || 55 | die, wie wir sahen, auch bei einfacher Waaren-circulation erfüllt sein muss. Blos d. Funktion d. Schätze ist hier verschieden. Blos muss d. vorhandne Geldmasse grösser sein, 1) weil bei d. kapitalistischen Production alles Product (mit erweiterter Ausnahme) als Waare producirt wird, also Geldverpuppung durchmachen muss; 2) auf Basis derselben Masse d. Waarenkapitals u. Werthumfang derselben nicht nur absolut grösser, sondern mit ungleich grösser Geschwindigkeit wächst; 3) ein immer ausgedehnteres variables Kapital stets in Geldkapital sich umsetzen muss; 4) mit d. Erweiterung der Production die Bildung neuer Geldkapitalien Schritt hält, also d. Material für ihre Schatzform, da sein muss.—Gilt dies schlechthin für d. erste Phase d. kapital. Production, wo selbst d. Creditsystem von vorzugsweis metallischer Circulation begleitet ist, so gilt es selbst soweit für d. entwickeltste Phase d. Creditsystems, da dessen Basis d. Metallcirculation bleibt. Einerseits können hier additionelle Goldproduction (Production d. edlen Metalle), so weit sie reichlich od. spärlich abwechselnd, störende Preiseinflüsse auf Waaren produciren, nicht nur in längren, sondern innerhalb sehr kurzer Perioden;

andererseits ist der ganze Creditmechanismus beständig damit beschäftigt, d. wirkliche Metallcirculation durch allerhand Operationen,¹⁾ Methoden, technische Einrichtung, auf ein (relativ) stets wachsendes Minimum zu beschränken—womit auch d. Künstlichkeit d. ganzen Maschinerie u. d. Aussetzung grösseres Gefährdung derselben Hand in Hand gehn.

- 1) ここにはセミコロンと短いダッシュとが重なっている。セミコロンを横棒で消してコンマに修正したものとして、エンゲルス版どおりコンマにしておく。

さまざまな立場にある B, B', B'', 等々 (I) の 可能的な《新》貨幣資本 が実際の貨幣資本として働き始めると、彼らが彼らの生産物 (彼らの 剰余生産物の諸部分) を互いに買い合いました売り合わなければならないこともありうる。 そのかぎりでは, 剰余生産物の流通に前貸された貨幣は——正常な経過の場合には——、さまざまな立場にある B たち (I) がそのような貨幣を各自の商品の流通のために前貸したのと同じ割合で、彼らのもとに還流するのである。〔この場合、貨幣が支払手段として流通するのなら、相互の売買が一致しないかぎりでその 差額だけが支払われればよい。しかし、どこででもまず最初に、最も簡単な形態 (最も本源的な形態) で の金属流通を前提することが重要である。なぜならば、そうすることによって、流出や還流や差額決済など、要するに信用制度のもとで意識的に規制されるもろもろの経過として現われるすべての契機が、信用制度から独立に存在するものとして現われる〔sich darstellen〕からであり、事柄が、反省された形態で現われる以前に 自然発生的な形態で現われるからである。〔 〕¹⁾

- 1) この〔 〕のなかに書かれている部分の左側にはインクで縦線が引かれている。

〔原文〕

Es können d. verschiedenen B, B', B'' etc. (I), deren virtuelles |: neues :| Geldkapital als actives in Operation tritt, wechselseitig ihre

Producte (Theile ihres Mehrproducts) von einander zu kaufen u. an einander zu verkaufen haben. Pro tanto fließt das zur Circulation d. Mehrproducts vorgeschossne Geld—bei normalem Verlauf—in derselben Proportion an d. verschiedenen B's (I) zurück, in derselben Proportion worin sie solches zur Circulation ihrer respectiven Waaren Waaren¹⁾ vorgeschossen haben. [Circulirt d. Geld als Zahlungsmittel, so sind hier nur Bilanzen zu zahlen, so weit sich d. wechselseitigen Käufe u. Verkäufe nicht decken. Es ist aber wichtig überall zunächst d. metallne Circulation in ihrer einfachsten Form (ihr ursprünglichen) voraussetzen, weil sich damit flux, reflux, Compensation v. Bilanzen etc. kurz alle Momente, die im Creditsystem als bewusst geregelte Verläufe erscheinen, als unabhängig vom Creditsystem vorhanden darstellen, d. Sache in naturwüchsiger Form bevor in reflectirter. < > >

1) この Waaren は不必要であろう。

これまでは《追加》不変資本だけを問題にしてきたので、今度は追加可変資本の考察に転じなければならない。

[原文]

Jetzt haben wir, da es sich bisher nur um |: additionelles :| constantes Capital gehandelt uns zu wenden zur Betrachtung des additionellen variablen Kapitals.

『資本論』(第1部)云々で詳しく説明したように、資本主義的生産の基礎の上では労働《力》はつねに備えられており、また使用労働者数すなわち労働力の量をふやさなくても、必要なときに必要なだけより多くの労働を流動させることができる。それゆえ、さしあたりはこの点にこれ以上立ち入る必要はないのであって、むしろ、新たに形成された貨幣資本のうち

可変資本に転化できる部分はそれが転化する《べき》労働力をつねに見いだすことができる、と仮定しなければならない。¹⁾ 同様に（第1部で）説明したように、ある与えられた資本が蓄積によらないでその生産量を拡大することも、ある限界のなかではできる。しかしここでは独自の意味での資本蓄積が問題なのであり、したがって拡大された規模での生産は剰余価値の追加資本への転化を条件としており、したがってまた再生産あるいは生産の拡大された資本基礎 (Kapitalbasis) を条件としているのである。

- 1) このパラグラフのはじめからここまでのところの左側には鉛筆で2本の縦線が引かれている。さらに、ここからパラグラフの終わりまでの部分の左側にはインクで縦線が引かれている。

〔原文〕

Es ist weitläufig auseinandergesetzt in „Capital“ (Buch I) etc., dass Arbeit |: skraft:| immer vorrätig auf Basis kapital. Production u. wie, wenn nöthig, ohne Vergrößerung der beschäftigten Anzahl Arbeiter od. Masse Arbeitskraft mehr Arbeit flüssig gemacht werden kann. Pour ce moment daher nicht nöthig weiter hierauf einzugehn, vielmehr anzunehmen, dass der in variables Kapital verwandelbare Theil des neugebildeten Geldkapitals immer d. Arbeitskraft vorfindet, worin es |: zu:| verwandeln. Es ist ditto (in Buch I) auseinandergesetzt worden, dass ein gegebenes Kapital, ohne Accumulation, within certain limits seinen Productionsumfang erweitern kann. Hier aber handelt es sich um Kapitalaccumulation im specif. Sinn, so dass d. Production auf erweiterter Stufenleiter bedingt Verwandlung v. Mehrwerth in zuschüssiges Kapital, also auch erweiterte Kapitalbasis der Reproduction, resp. Production.

金生産者は自分の《金製の》剰余価値の1部分を可能的な貨幣資本として蓄積することができる。それが必要な大きさに達すれば、彼はそれを直接に可変資本に転換することができる（これにたいして他の生産者たちは

そのまえに彼の《剰余》生産物を売らなければならない)のであり、同様にそれを直接に不変資本の諸要素に転換することもできる。それにもかかわらず、後者の場合にはやはり、彼の不変資本の物質的な諸要素が彼の前になければならない。その場合、これまでの叙述で仮定されているように各生産者が在庫品を形成しながら作業したのち自分の商品を市場に出すのでもいいし、あるいは注文によって作業するのでもかまわない。どちらの場合にも生産の実体的な〔real〕拡大——すなわち剰余生産物——が、一方の場合にはすでに存在するものとして、他方の場合には可能的に提供可能なものとして、前提されているのである。

〔原文〕

D. Goldproducent kann einen Theil seines |: goldnen |: Mehrwerths als virtuelles Geldkapital accumuliren —; sobald es d. nöthigen Umfang erreicht, kann er es direct in variables Kapital umsetzen (während d. andren erst ihr |: Mehr:| Product zu verkaufen haben) ditto in Elemente d. constanten Kapitals. Doch muss er in letzteren Fall d. materiellen Element seines constanten Kapitals vorfinden. Ob, wie bei d. bisherigen Darstellung angenommen wird, dass jeder Producent auf Lager arbeitet u. dann seine Waare auf d. Markt bringt, od. ob er auf Ordre arbeitet, die reale Erweiterung d. Production—i. e. d. Mehrproduct in beiden Fällen vorausgesetzt, das einmal als schon vorhanden, d. andremal als virtuell lieferbar.

4)¹⁾ これまでわれわれは、A, A', A'', 等々(I)が彼らの剰余生産物をB, B', B'', 等々(I)に売ることを前提してきた。しかし、A(I)が、B(II)への販売によって自分の剰余生産物を貨幣化する、と仮定しよう。このことはただ、A(I)がB(II)に生産手段を売るが、そのあとで消費手段を買わない、ということによってのみ、つまりAのほうの一方的な販売によってのみ、行なわれることができる。ところで、c(II)が商品資本の形

態から不変資本の現物形態に転換されるのは、||57²⁾ v(I) だけではなく m(I) の少くとも 1 部分もまた c(II) (これは消費手段の形態で存在する) の 1 部分と転換されることによつてのみ可能であり、それゆえいま A が自分の m(I) を貨幣化するのには、この転換が行なわれないことによつて——すなわち A(I) が自分の m(I) の販売で手に入れた貨幣を、商品 c II の購買で〔商品に〕転換するかわりに、流通から引きあげることによつて——なのであるが、そのかぎりでは、A(I) のほうではたしかに 可能的追加貨幣資本の形成 が行なわれるが、しかし他方では B(II) の不変資本のうち価値の大きさから見てそれに等しい 1 部分が、不変資本 (生産資本の不変部分〔 〕) の現物形態に転換されることができないまま、商品資本の形態 で動きが取れなくなっているわけである。換言すれば、B の商品の 1 部分が——そして、一見して明らかに³⁾、この部分が売れなければ B は自分の不変資本を全部は生産的形態に再転化させることができないのに——売れなくなったのであり、それゆえまた、B にかんしては 過剰生産 が生じるのであって、この過剰生産は同じく B にかんしては 再生産 を——不変な規模での再生産でさえも——妨げるのである。

- 1) この「4)」は、赤鉛筆で丸く囲まれている。
- 2) ページづけを誤ったのであろう、草稿56ページは存在しない。
- 3) prima facie はここでは、「一見したところ」ではなくて「一見して明らかに」の意味であろうと考える。

〔原文〕

4) Wir haben bisher vorausgesetzt, dass die A, A', A'' etc. (I) ihr Mehrproduct verkaufen an d. B, B', B'' etc. (I). Gesetzt aber A(I) vergolde sein Mehrprodukt durch Verkauf an B(II). Dies kann nur dadurch geschehn, dass nachdem er an II) Produktionsmittel verkauft, er nicht hinterher Consumtionsmittel kauft, also nur durch einseitigen Verkauf seinerseits. Sofern nun c(II) auf Form v. Waarenkapital in d. Naturalform v. constantem Kapital nur umsetzbar dadurch ||57| dass nicht nur v(I) sondern auch ein Theil wenigstens von m(I)

sich |; umsetzt:| gegen einen Theil v. $c(II)$ (das in Form v. Consumtionsmitteln existirt), hence—nun A sein $m(I)$ dadurch vergoldet, dass dieser Umsatz nicht vollzogen wird—i. e. dass $A(I)$ das aus Verkauf seines $m(I)$ von II) gelöste Geld der Circulation entzieht, statt es in Kauf v. Waare cII umzusetzen—so findet zwar auf Seite d. $A(I)$ Bildung von virtuellen zusätzlichen Geldkapital statt, aber auf andrer Seite liegt ein d. Werthumfang nach gleicher Theil d. constanten Kapitals von $B(II)$ fest in d. Form v. Waarenkapital, ohne sich in d. Naturalform von constantem Capital (constantem Theil des productiven Kapitals<>) umsetzen zu können. In andren Worten: ein Theil der Waaren d. B.—u. prima facie ein Theil, ohne dessen Verkauf er sein constantes Kapital nicht ganz in productive Form rückverwandeln kann—ist unverkäuflich geworden, u. mit Bezug auf ihn findet daher Ueberproduction statt, welche ditto mit Bezug auf ihn d. Reproduction—selbst auf gleichbleibender Stufenleiter—hemmt.

この場合には、 $A(I)$ の側での追加的可能貨幣資本はたしかに剰余生産物(剰余価値)の貨幣化された形態であり、したがって生産の指標〔index〕ではあるが、しかし剰余生産物(剰余価値)をそのものとして見れば、それは単純《再》生産の現象であって、《まだ》拡大された規模での再生産の現象ではない。不変な規模での $c II$ の再生産が行なわれるためには、 $(w^1 + m) I$ は〔ここではこのことはいずれにしても m 部分にかかわることなのであるが〕最終的には $c II$ と轉換されなければならないのである。ところで、 $A(I)$ は、自分の剰余生産物を $B(II)$ に売ることによって、それに相当する不変資本価値部分を《 $B(II)$ に》現物形態で供給したのであるが、しかし同時に、流通から貨幣を引きあげることによって——自分の販売をそのあとでの購買で補完しないことによって——価値から見てそれに等しい $B(II)$ の商品部分を売れなくしたのである。だから、社会的総

《再》生産——それは資本家 I をも II をも 一様に 含んでいる——に目を向けるならば、A(I)の剰余生産物が可能的貨幣資本に転化するということは、価値の大きさから見てそれに等しい商品資本(B II)が生産資本(不変資本)に再転化できないということを表現している。つまり、拡大された規模での生産を可能的に表現しているのではなく、単純再生産の阻害を、それゆえ単純再生産における不足を表現しているのである。A(I)の剰余生産物の形成や販売はそれ自身単純再生産の現象なのだから、ここでは単純再生産そのものの基礎の上で、次のような相互に制約しあう諸現象が見られるのである。すなわち、部門 I) での可能的追加貨幣資本の形成 {それゆえ II の立場から見ての過少消費}。部門 II) での、生産資本に再転化できない商品在庫の固着、したがって (II にとっての) 相対的過剰生産。過剰な貨幣資本(I)と再生産における不足(II)。

1) 「w」——明らかに「v」の誤記である。

〔原文〕

In diesem Fall: Das zusätzliche virtuelle Geldkapital auf seiten |: von :| A(I) ist zwar vergoldete Form von Mehrprodukt (Mehrwert), also ein index von Production; aber Mehrprodukt (Mehrwert) als solches betrachtet ist Phänomen einfacher |: Re :| Production, |: noch :| nicht d. Reproduction auf erweiterter Stufenleiter. ($w^{13} + m$)I [wo dies jedenfalls von Theil von m gilt] müssen sich umsetzen schliesslich gegen cII), damit d. Reproduction von cII auf gleichbleibender Stufenleiter vor sich gehe. Nun A(I) durch d. Verkauf seines Mehrproducts an B(II) hat einen entsprechenden Werththeil von dem constanten Kapital |: ihm :| in Naturalform geliefert, aber zugleich durch Entziehung d. Geldes aus d. Circulation—durch nicht Vervollständigung seines |: Ver :| Kaufs mittelst nachfolgenden Kaufs—einen d. Werth nach gleichen Waarentheil des B(II) unverkäuflich gemacht. Fassen wir also d. gesellschaftliche Gesamtt |: Re :| production ins Auge—die gleichmässig d. Kapitalisten I u. II umschliesst—so ist²⁹ drückt die

Verwandlung d. Mehrproductes v. A(I) in virtuelles Geldkapital die Nichtrückverwendbarkeit eines d. Werthumfang nach gleichen Waarenkapitals (v. B II) in productives Kapital (constantes) aus, also nicht virtuell Production auf erweiterter Stufenleiter, sondern Hemmung der einfachen Reproduction hence ein Deficit in der einfachen Reproduction. Da d. Bildung u. d. Verkauf d. Mehrprodukts von A(I) selbst Phänomene der einfachen Reproduction sind, so haben wir hier auf Grundlage d. einfachen Reproduction selbst folgende einander wechselseitig bedingende Phänomene: Bildung v. virtuell zuschüssigem Geldkapital bei Kl. I), (daher Unterconsumtion vom Standpunkt II), Festsetzung v. Waarenvorräthen auf Seite II, die nicht rückverwendbar in productives Kapital, also relative Ueberschüssiges Geldkapital (I) u. Deficit in d. Reproduction (II).

- 1) 「w」——明らかに「v」の誤記である。なお、ここでの「v+m」はじっさいには「W+M」と書かれているようだが、はじめに記した約束にしたがって小文字にしておく。
- 2) この ist は、次の語の drückt を書いたさいに消すべきであったのを忘れたのであろう。

この点についてここでこれ以上詳しく論じることにはしないで、次のことを述べておこう。単純再生産の叙述では、全剰余価値(IおよびII)が収入として支出されることが前提されていた。しかし実際には、剰余価値の1部分が収入として支出されるのであって、他の部分は資本に転化するのである。現実の蓄積はこの前提のもとでのみ行なわれる。蓄積は消費を犠牲にして行なわれるのだ、というのは——このように一般的に言うのであれば——それ自身、資本主義的生産の本質に矛盾する幻想である。というのは、この幻想は、資本主義的生産の目的および推進的動機は消費であって、剰余価値の獲得と資本化すなわち蓄積ではない、ということ的前提し

ているからである。そのほかこの点に関連する諸問題は、いま、部門Ⅱでの蓄積がどのようにして行なわれることができるのかを見ることによって、さらに明らかになるであろう。

〔原文〕

Ohne an diesem Punkt hierbei näher zu verweilen, folgende zu bemerken: Es ist bei Darstellung d. einfachen Reproduktion vorausgesetzt worden, dass d. ganze Mehrwerth (I u. II) als Revenue verausgabt wird. In d. That aber wird ein Theil d. Mehrwerths als Revenue verausgabt, ein anderer in Kapital verwandelt. Wirkliche Accumulation findet nur unter dieser Voraussetzung statt. Dass d. Accumulation sich auf Kosten der Consumtion mache ist—so allgemein gefasst—selbst eine Illusion, die dem Wesen d. kapitalistischen Produktion widerspricht, indem sie voraussetzt, dass d. Zweck u. treibendes Motiv derselben d. Consumtion sei, nicht aber Ergatterung v. Mehrwerth u. Capitalisation desselben, i.e. Accumulation. Die weiter hiermit verknüpften Probleme werden sich weiter zeigen, indem wir jetzt betrachten, wie d. Accumulation in d. Klasse II von sich gehn kann.

〔以下次号〕